

宮島の歴史と民俗

HISTORY AND FOLKLORE OF MIYAJIMA

NO. 11

1992

宮島町立宮島歴史民俗資料館

MIYAJIMA MUNICIPAL HISTORY AND FOLKLORE MUSEUM

目 次

○はじめに.....	1
○「巖島絵図」について（続）.....高橋修三.....	2
○資料館の活動.....	25
1. 入館者数.....	25
2. 年度別予算一覧.....	27
3. 資料収集.....	28
4. 調査研究等.....	29
5. 展示普及等.....	29
6. 施設の整備.....	30
7. 歴史民俗資料館協議会.....	30
8. 購入図書・受贈交換図書.....	30
○町史のあゆみ.....	37
○翻刻『巖島八景』.....高橋修三.....	41

はじめに

1994（平成6）年の新春風景を紹介するテレビの映像に、今年は朱丹に輝く厳島神社の社殿が映し出されました。そこにはもう3年前の台風禍の痕跡はなく、明るく平和な姿が印象的でした。そして今厳島神社は、本社周辺の復旧工事の締めくくりとなった能舞台も、鏡板が納められれば完了するところまでできています。

さて、今年も「宮島の歴史と民俗」をお届けする季節を迎えました。これまで刊行しました各号に対しましては、その都度各方面から温かいご鞭撻をお寄せいただき深く感謝いたしております。本号につきましても、よろしくご指導を賜りますようお願いいたします。

前号でご報告しました収蔵庫は、ほぼ1年の枯らしを終える頃となりました。今この1年間にわたる枯らしの成果、温湿度調整機能の状況等の集約をしております。その結果を踏まえながら収蔵活動に入りたいと考えます。

学芸員室にも近く関係者が移り、町史編纂の拠点もこちらに移行します。ただし当館の学芸員は資料館との間を往復することになりますのでお含み下さい。

開館以来20年間を経過し、いろいろな課題を抱えながら、なかなか飛躍のきっかけをつかみ得ないでいる私どもですが、これからもいっそうのご指導をお願い申しあげ、ごあいさついたします。

平成6年3月

宮島歴史民俗資料館
館長 藤岡 武人

「厳島絵図」について（続）

宮島歴史民俗資料館学芸員

高橋修三

凡 例

1. 本稿には明治期以降の厳島絵図のうち、表中の※を施した絵図を収録する。
2. 前半には写真を掲載し、後半には絵図に記されている注記などの文字を原資料の位置に準じて翻字した。但し、発行者など図中の一部、及び、ふりがなは省略した。
3. 翻刻にあたっては、漢字はできるだけ新字体に改めたが、そのまま用いた場合がある。
4. 墨減・破損などによる判読不能の箇所は、□・□□で示した。

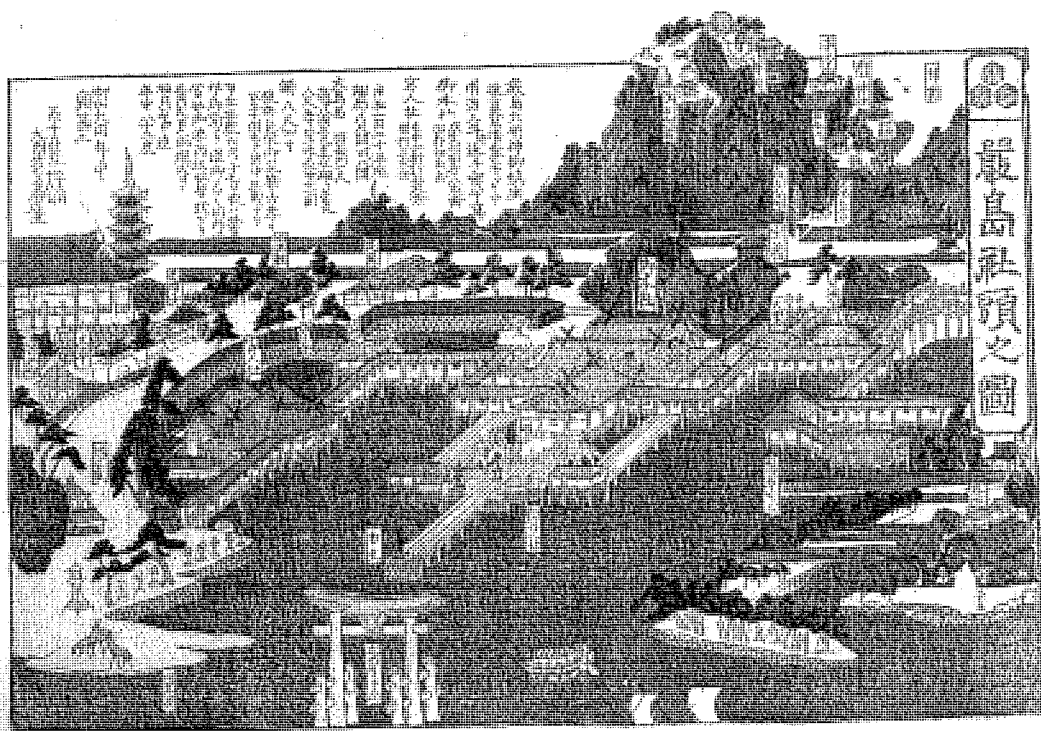
「厳島絵図」関係資料一覧（明治期以降）

番号	資 料 名	寸 法	製 作 年	絵師・版元・発行者・発行所等	備 考
1	厳島社頭之圖	35.8×49.0	明治3年		色刷 ※1
2	厳島社頭之圖	34.5×46.5	明治4年		色刷
3	厳島社頭之圖	33.0×46.5	明治7年		色刷
4	嚴嶋彌山全景	32.5×23.5	明治16年	著画彫刻 嚴島 中村熊次郎 出版人 嚴島 沖鶴太郎	単色 ※2
5	大日本安藝國嚴嶋神社之全景	24.0×35.5	明治21年4月	出版人 嚴島 藤山文助	単色 ※3
6	大日本安藝國嚴嶋社之略圖	31.5×49.0	明治27年6月	著作兼発行者 広島市 森光次郎 印刷者 広島市 吉村岩吉	多色 ※4
7-a	大日本三景之一安藝國嚴島之圖	24.5×68.5	明治28年3月	耕山筆 芳若彫	多色 ※5
-b	嚴嶋背面之圖	24.5×68.5		著作者印刷兼発行者 広島市 野田峯太郎	多色 ※6
8	日本三景之一嚴島神社之圖	38.0×53.5	明治28年6月	発行者 大阪市 鈴木常松 印刷者 大阪市 □□徳次郎 発売所 広島市 積善館	単色 ※7
9	日本三景之一嚴島神社之圖	36.5×50.5	明治28年6月	著作兼発行者 広島市 鈴木常松 印刷者 阪田吉太郎 専売所 宮島 瀬田商店	多色
10	安藝國嚴島真景之圖	33.0×45.5	明治28年7月	著作兼印刷発行人 大阪市 田井久之助	多色
11	日本三景之一嚴島實地真景之圖	38.5×52.0	明治30年5月	著作兼発行人 大阪市 田井久之助 発売所 宮島	多色
12	日本三景の一嚴島實地真景之圖	38.2×53.2	明治30年7月	著作兼印刷発行人 嚴島 松本喜三郎（産物部）	多色
13	日本三景之一嚴島實地真景之圖	27.6×39.6	明治31年3月	著作兼発行人 大阪市 田井久之助 発売所 宮島 清水為蔵	多色
14	日本三景之一嚴嶋旅客便覧地圖	39.7×54.8	明治31年9月	森景重写 研宏堂刻 著作兼発行人 嚴島 滝戸政吉 印刷人 大阪市 田井久之助	多色 裏面に「嚴島 弥山全景」等を印刷 ※8
15	日本三景之一嚴島實地真景之圖	34.7×50.0	明治32年7月	著作兼印刷発行人 嚴島 □□□□ 嚴島 □□□□	多色

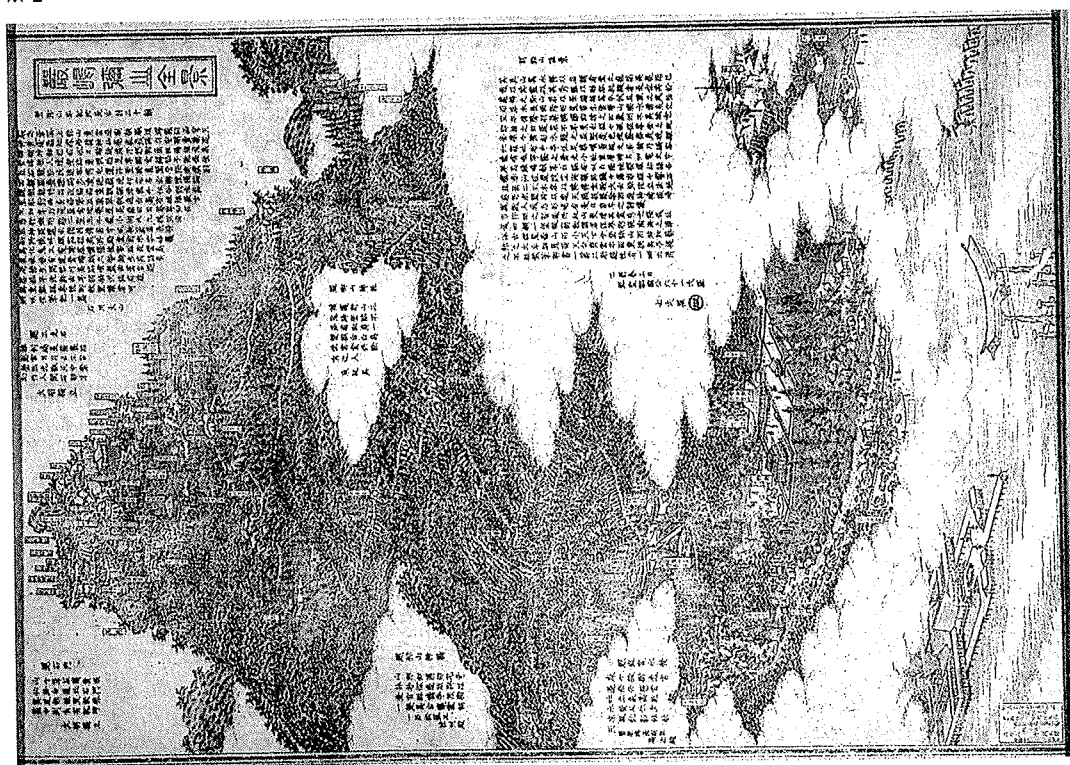
番号	資 料 名	寸 法	製 作 年	絵師・版元・発行者・発行所等	備 考
16	日本三景之一嚴島實地真景之圖	27.0×37.7	明治34年 3 月	著作兼発行人 嚴島 山本寅吉	多色
17	日本三景之一嚴島實地真景之圖	37.0×51.7	明治34年 3 月	著作兼発行人 宮島 沼田栄三郎	多色
18	日本三景之一嚴島神社之圖	31.7×47.0	明治34年 5 月	著作兼発行者 広島市 鈴木常松 印刷者 大阪市 中井徳次郎 専売所 宮島 瀬田商店	多色
19	日本三景之一嚴島實地真景之圖	37.8×51.3	明治37年 4 月	著作兼印刷発行人 大阪市 神藤民三 発売人 宮島 三木卯三郎	多色
20	日本三景之一嚴島神社全圖	39.0×53.5	明治37年 7 月	著作兼印刷発行人 嚴島 三木卯三郎	多色 ※ 9
21	日本三景之一嚴島神社真景全圖	32.2×47.0	明治37年 7 月	著作兼印刷発行人 宮島 沼田栄三郎	多色
22	日本三景之一嚴島神社之圖	39.0×54.8	明治38年 7 月	著作発行兼印刷者 大阪市 森巳之助 専売所 嚴島 瀬田春錦堂	多色
23	日本三景之一嚴島實地真景之圖	39.5×54.0	明治44年 6 月	翻刻兼印刷発行者 東京市 銀花堂 野村銀治郎	多色
24	日本三景之一嚴島神社之圖	39.0×54.8	大正 4 年 2 月	□□□□ □□ 東京市 野村銀治郎	多色
25	日本三景之一嚴島神社之圖	34.5×49.5	大正 7 年 6 月	発行画作印刷発行者 東京市 野村銀治郎	多色
26	日本三景之一嚴島神社之圖	39.0×53.5	大正13年 7 月	著作兼発行所 宮島 物産営業組合 印刷所 広綾オフセット印刷	多色 ※10
27	日本三景之一嚴島神社之圖	34.5×48.0	昭和13年 2 月	著作印刷兼発行者 嚴島 瀬田律三 発売元 宮島 物産営業組合	多色 ※11
28	嚴島社頭之圖	33.2×47.0	(明治)	宮島 仙岳板	色刷 ※12
29	嚴島社頭之圖	34.0×47.0	(明治)	宮島幸町 正木屋房吉	色刷
30	嚴島社頭之圖	33.0×46.5	(明治)	宮島 清製堂板	色刷
31	嚴島社頭之圖	33.0×46.5	(明治)	宮島 一木鶴松板	色刷
32	安藝國嚴島全景 表	16.5×49.5	(明治)		墨刷 ※13
33	安藝國嚴島紅葉谷全景	19.9×26.8	(明治)	著者並鐫 嚴島 中村熊次郎 出版人 岩村平助 もみじわ惣板	墨刷 ※14
34	安藝國嚴島紅葉谷全景	18.7×27.0	(明治)	出版人 嚴島 岩村平助 もみじわ惣板	墨刷

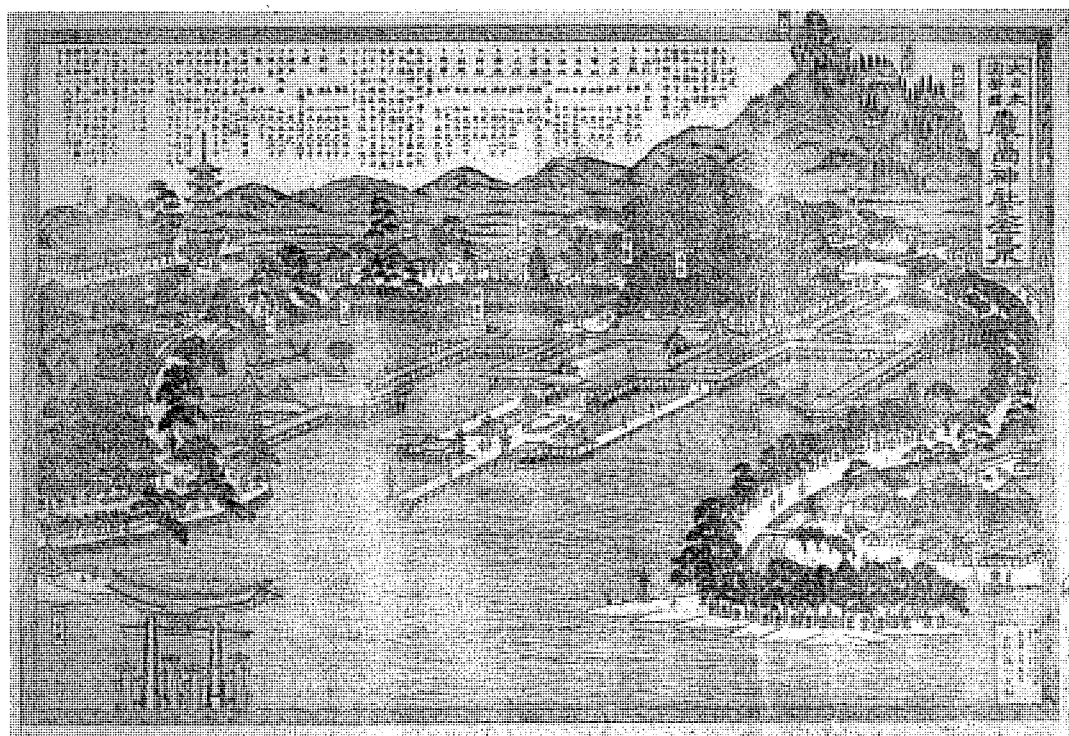
(寸法は縦×横。単位はcm)

※ 1

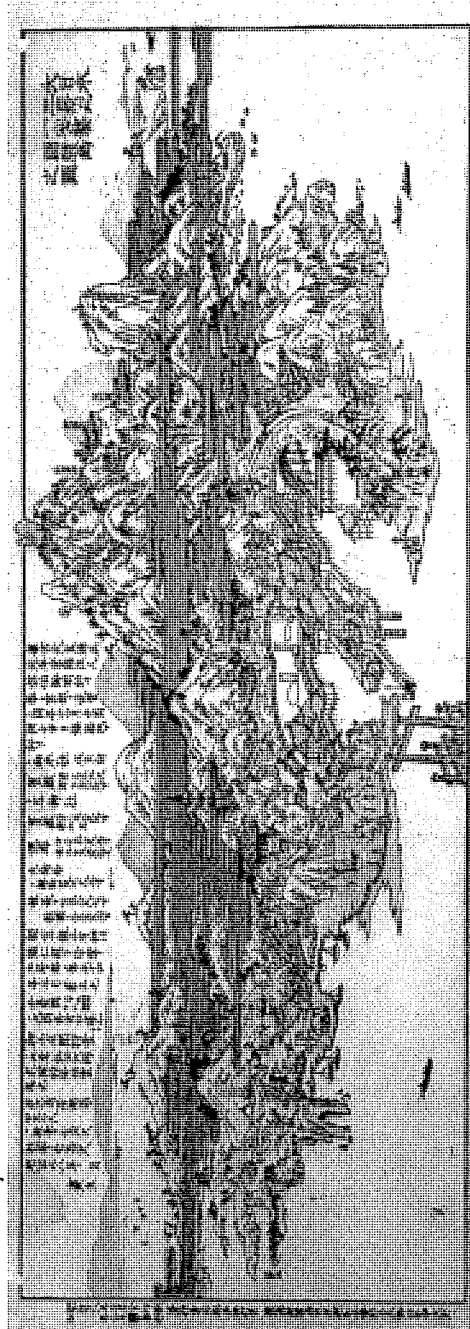


※ 2

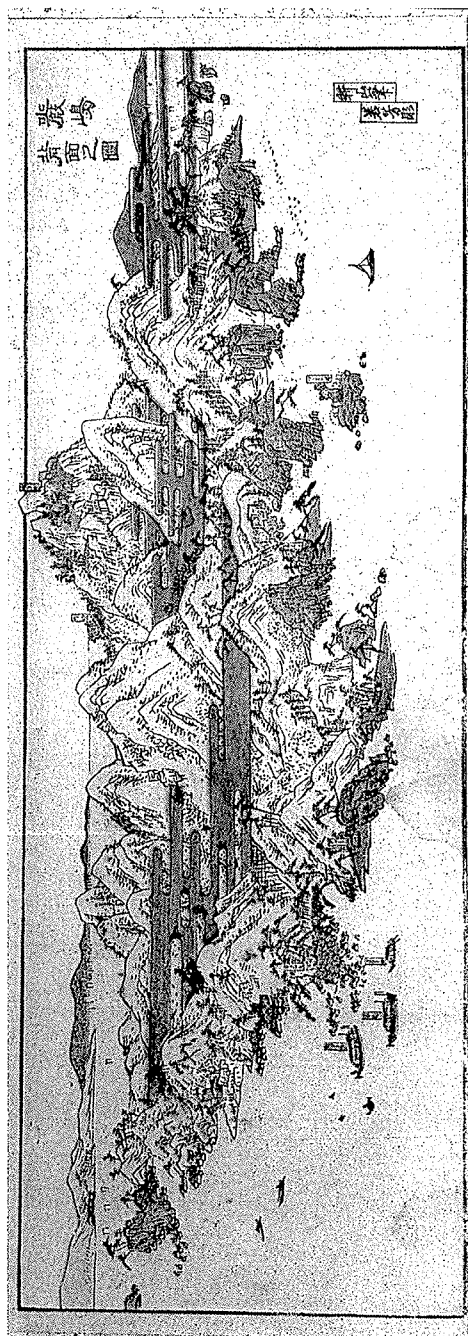




※ 5



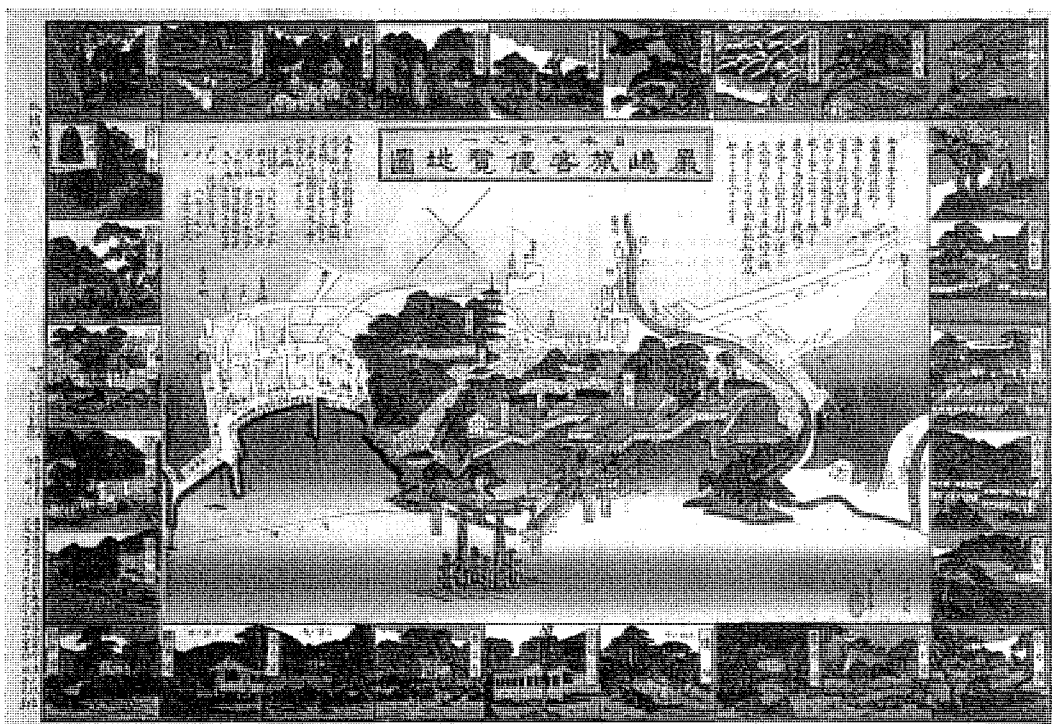
※ 6



※ 7



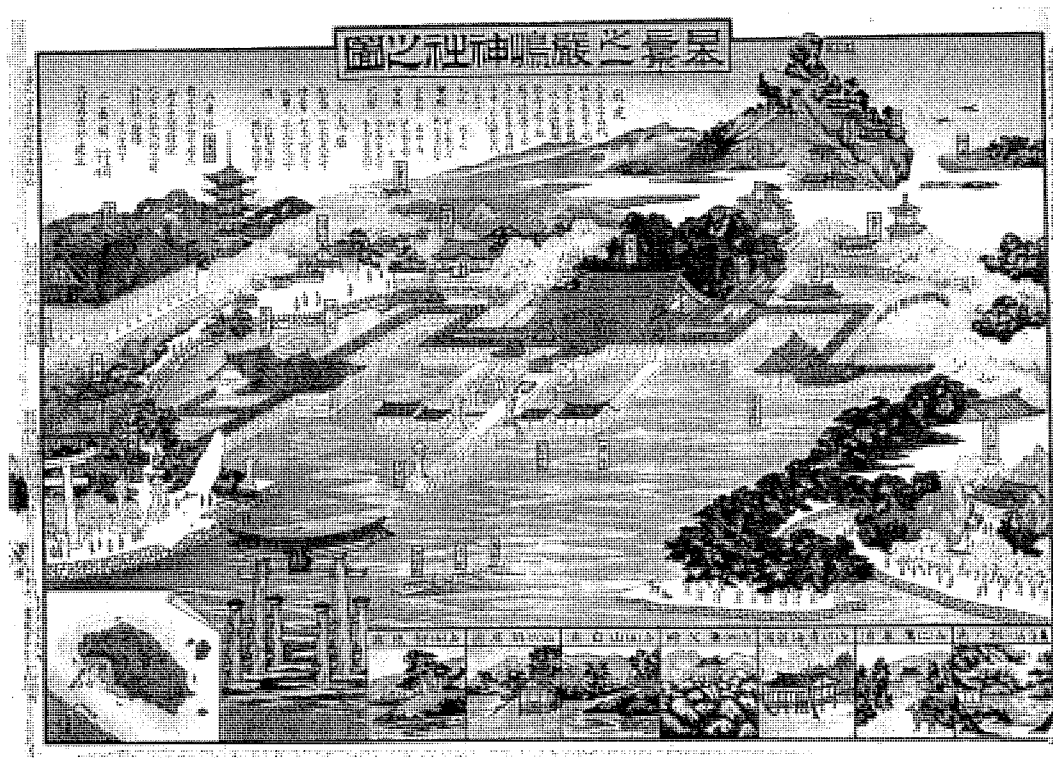
※ 8



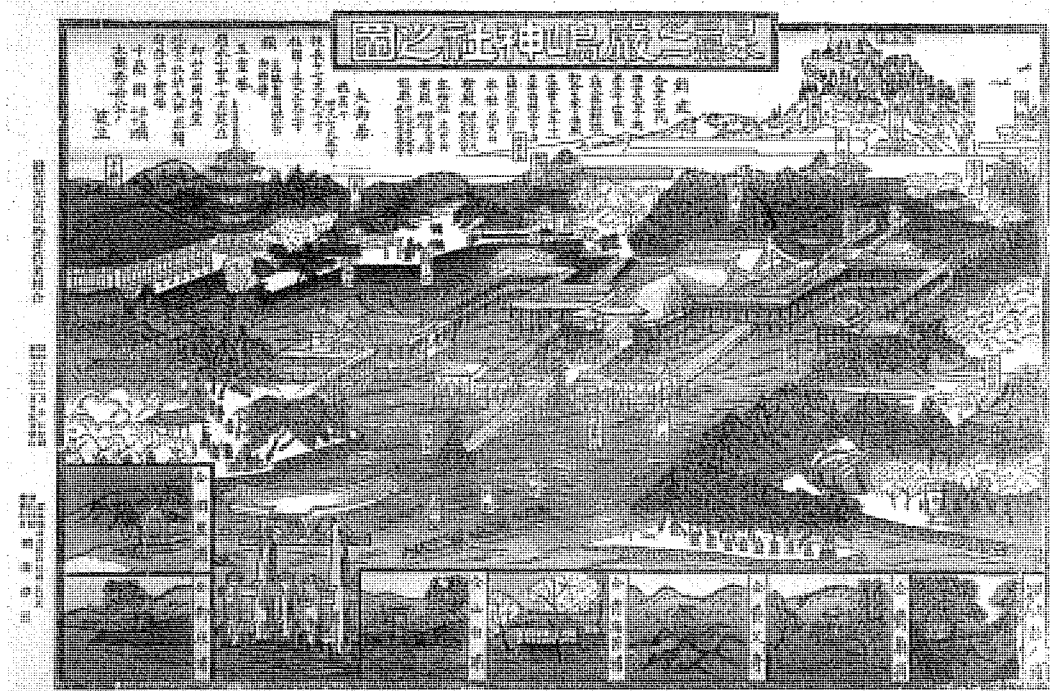
※ 9



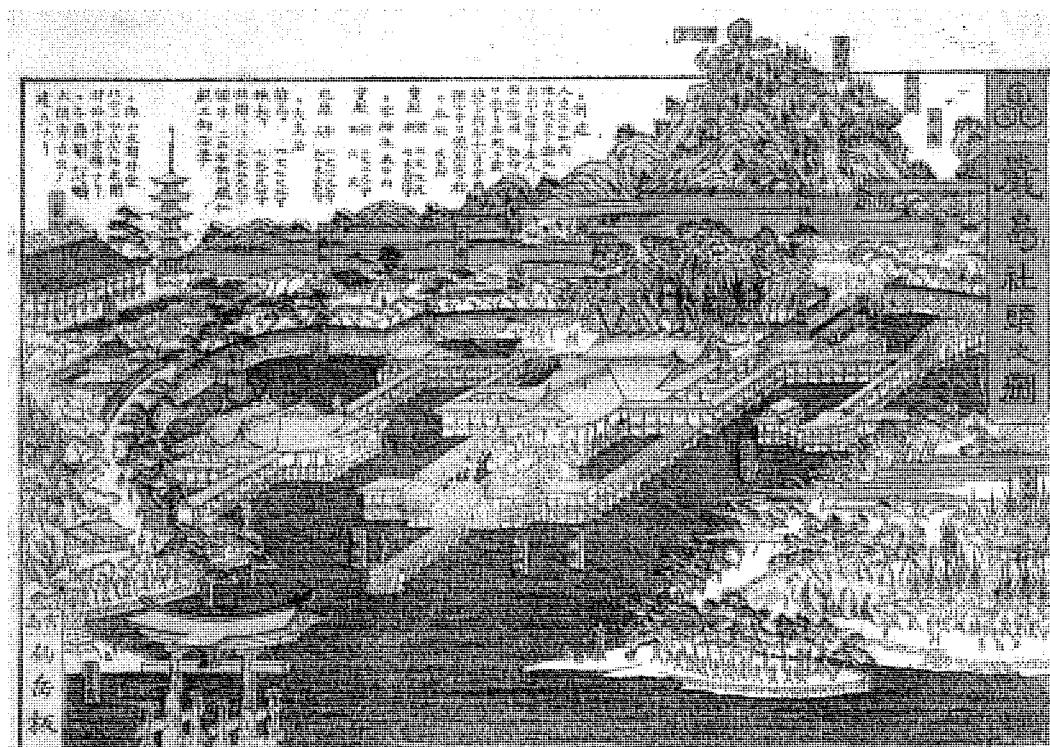
※10



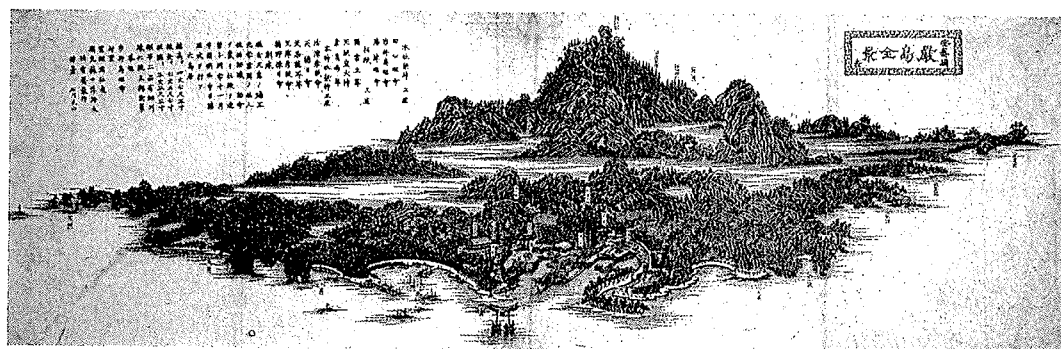
※11



※12

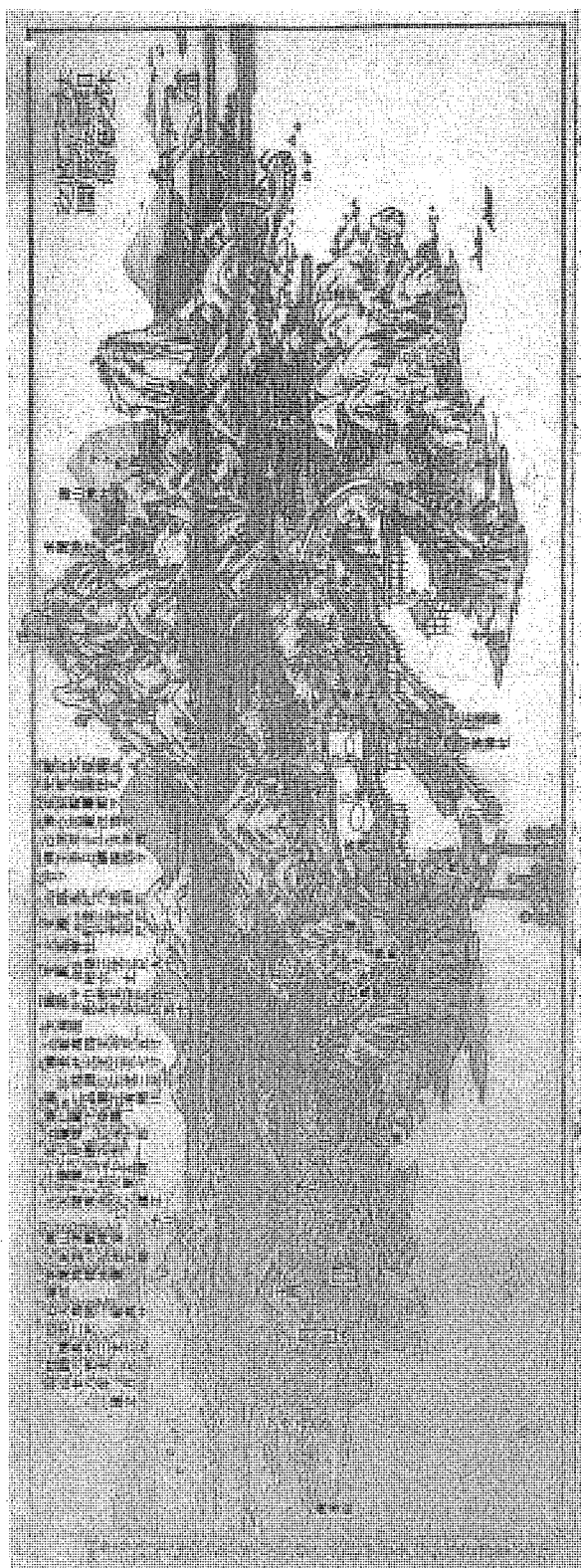


※13

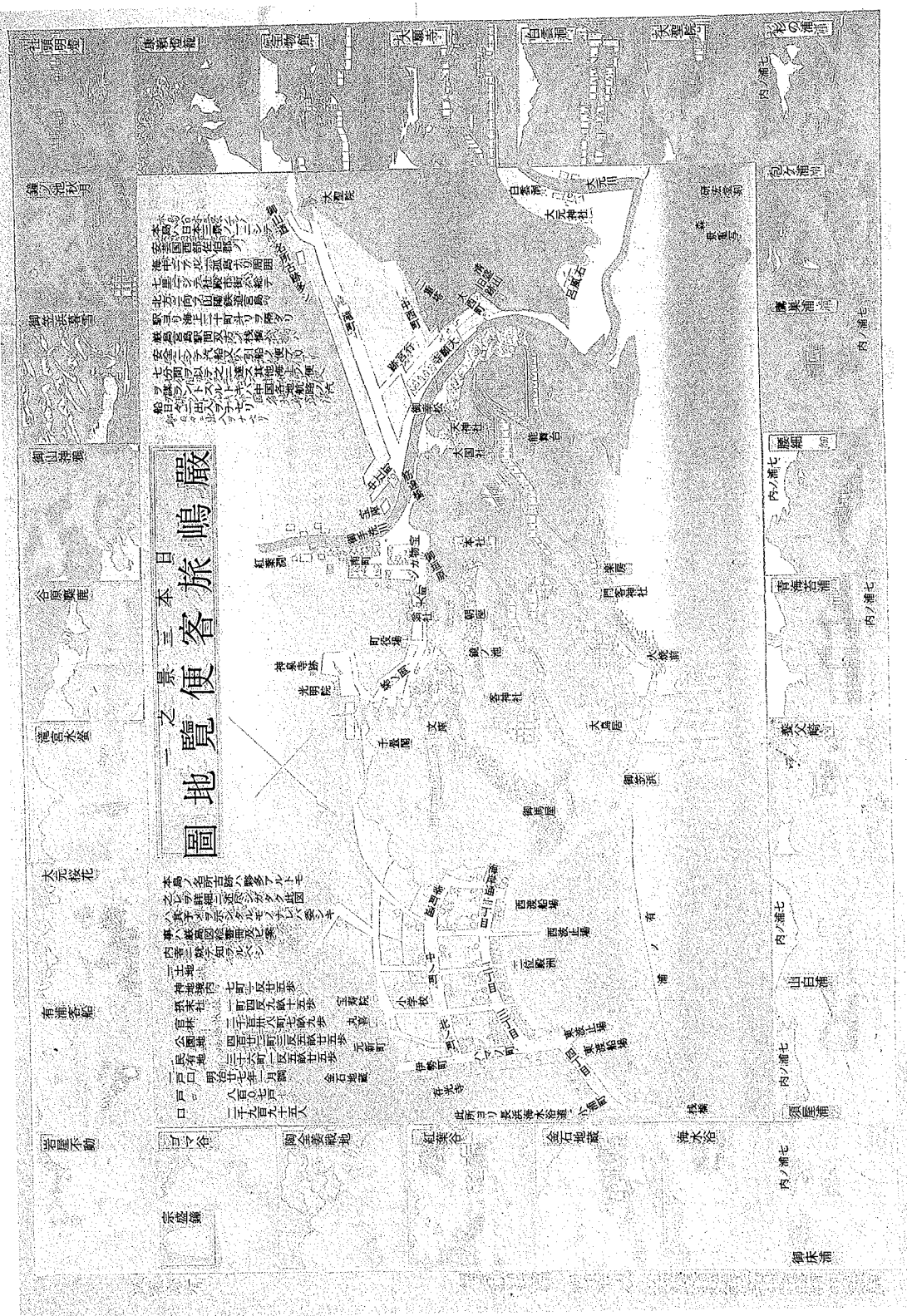


※14



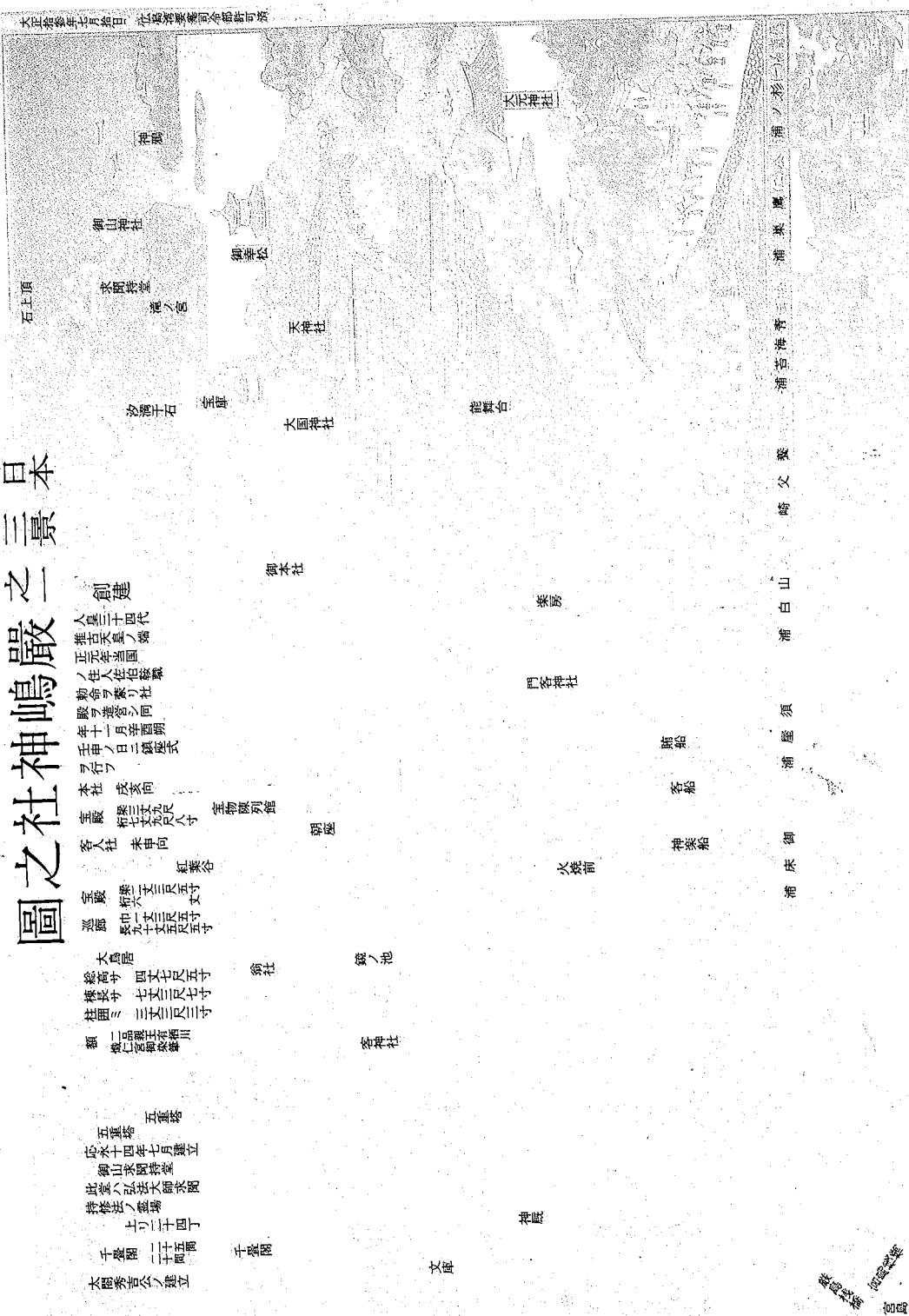






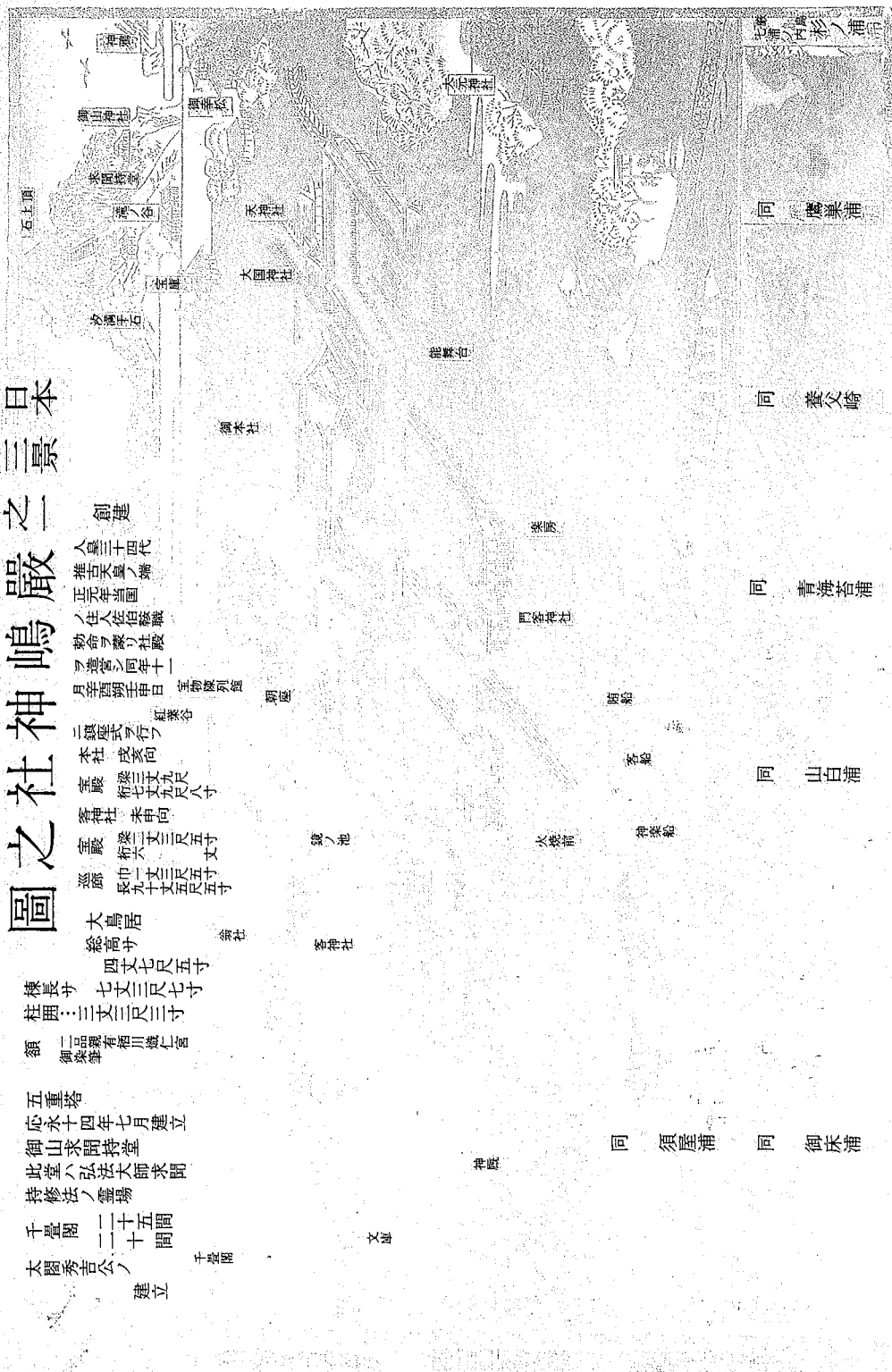
圖之神鳴嚴之一景日本

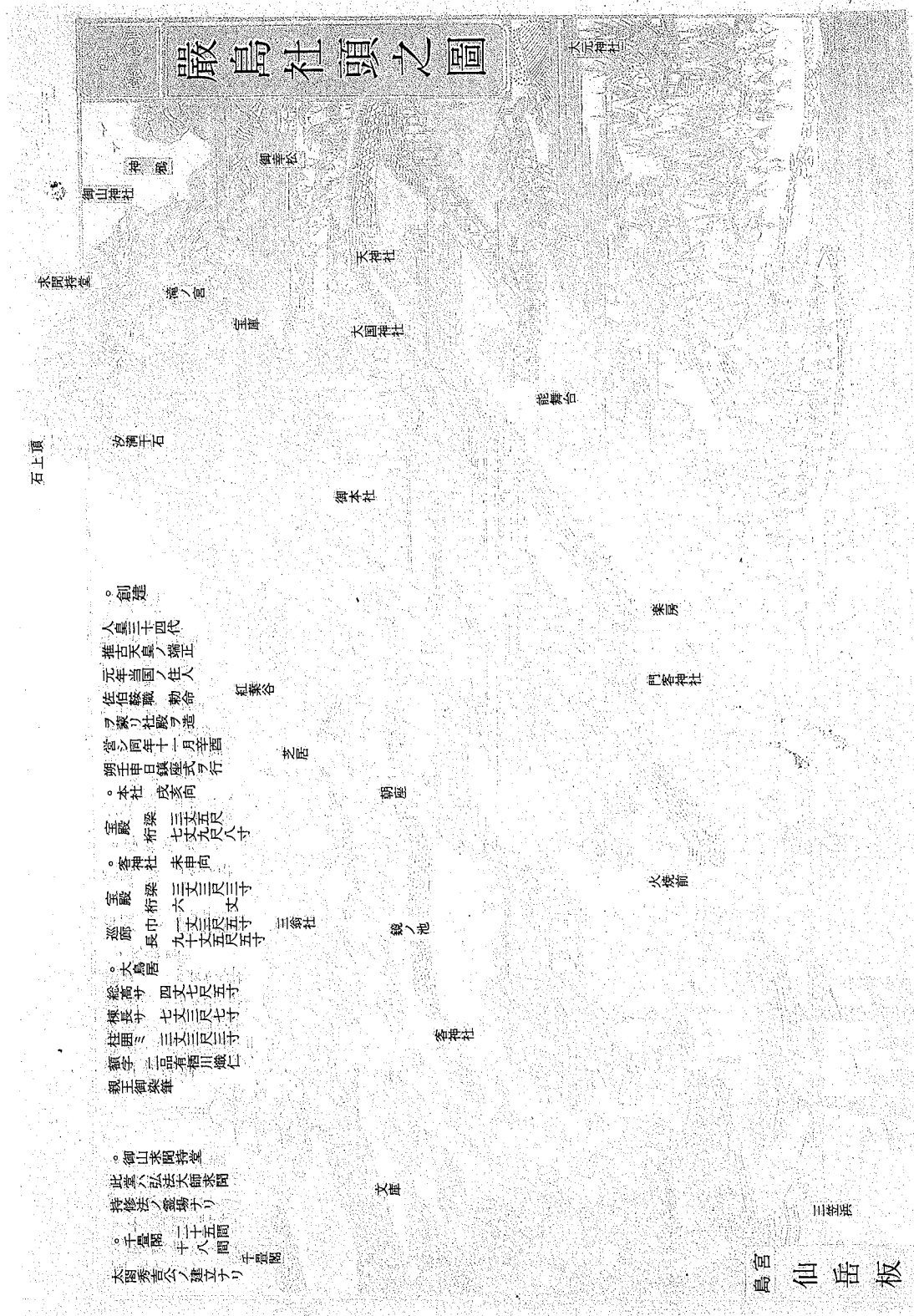
大正拾參年七月拾日 広島海軍司令部許可済

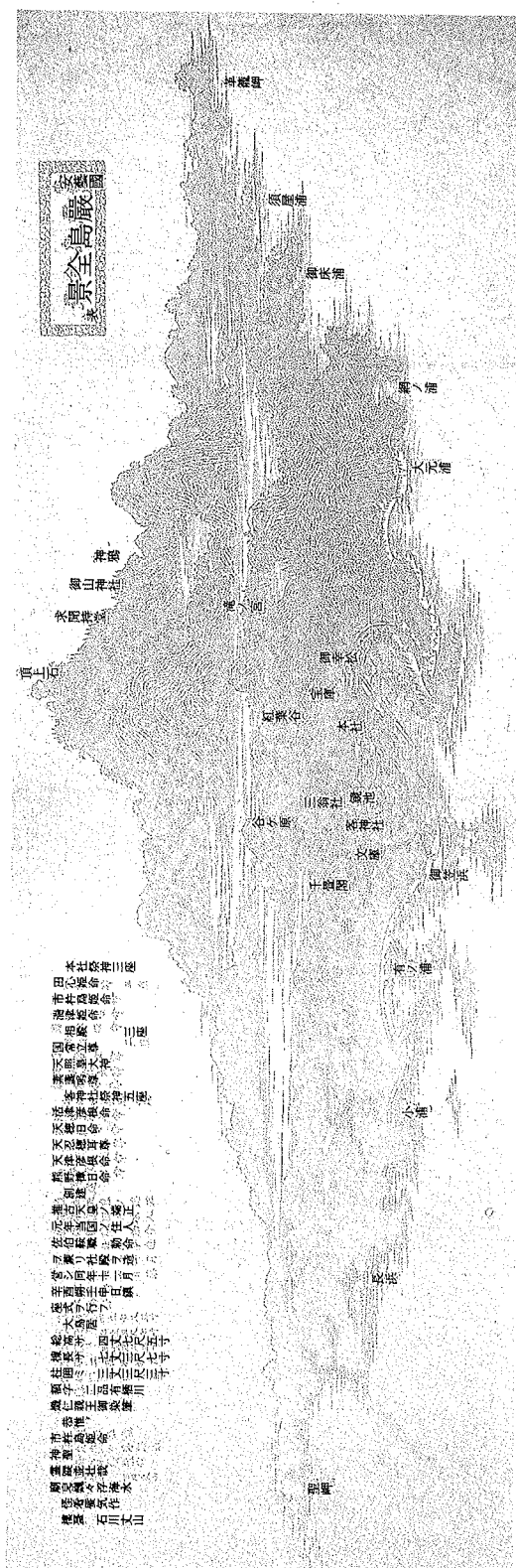


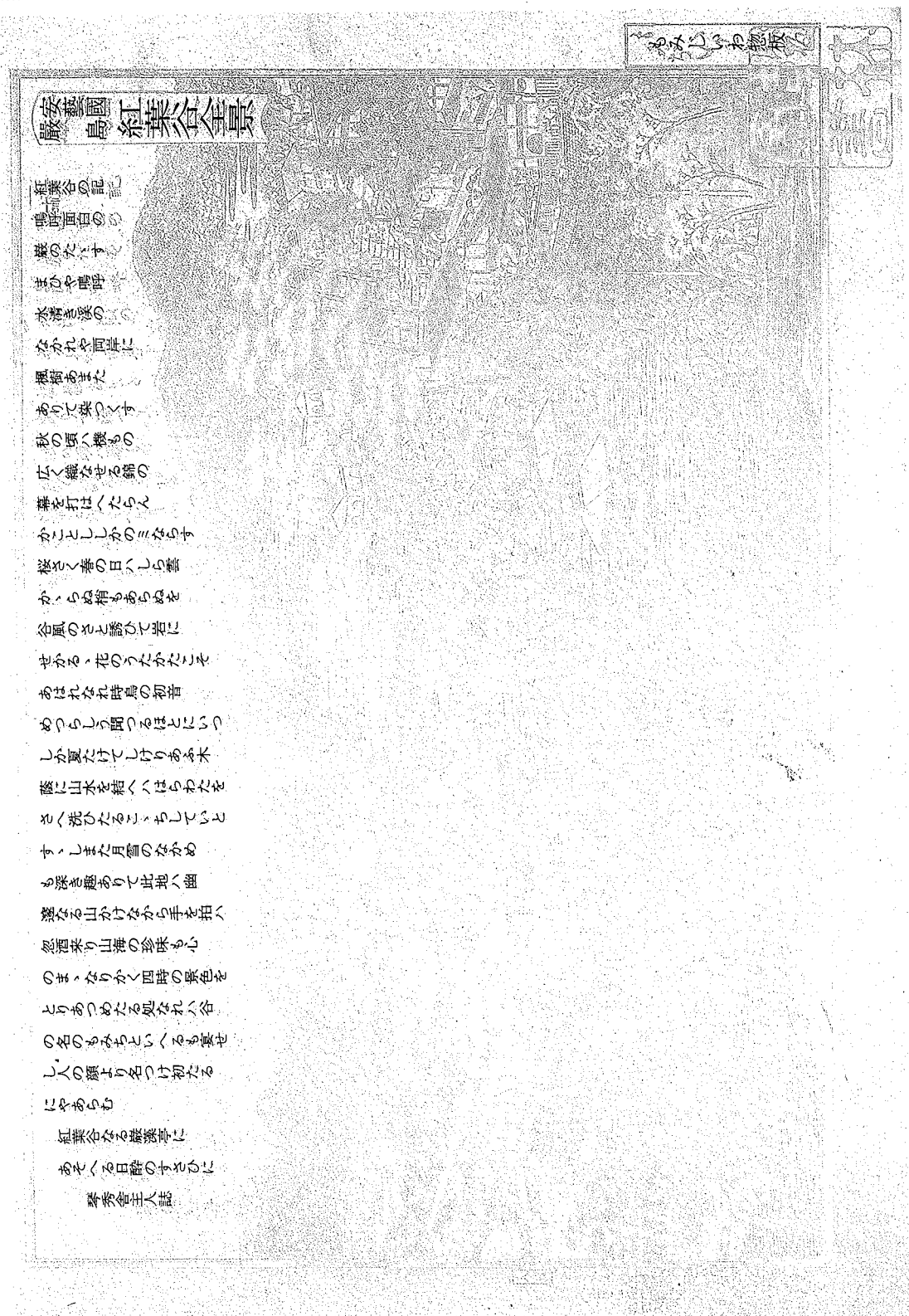
日本三景之二嚴島之神社之圖

創建
人皇三十四代
推古天皇
正和年間
住人佐伯藤藏
勅信(藤藏)社殿
享和二年十一月
是年西曆三月五日 至物廣列國
紅葉谷
二領殿式奉行
本社 長多向
至殿 桁梁三丈九尺
桁七丈九尺八寸
寄神社 未詳向
至殿 桁梁二丈三寸五寸
桁六丈二寸
巡廊 長九丈三寸五寸
長十丈三寸五寸
大鳥居
總高廿
四丈七尺五寸
棟長廿
七丈三尺七寸
柱間三丈三寸三寸
額 二品親有栖川姬仁宮
御榮筆
五重塔
応永十四年七月建立
御山來聞待堂
此堂弘法大師求聞
持修法ノ靈場
千疊閣 二十五間
太閤秀吉公ノ
建立









紅葉谷の記

鳴呼直日の

様のだすく

まひや鳴呼

水道と溪の

なかれや河岸に

楓樹あまた

ありて染つくす

秋の頃へ様もの

広く織なせる錦の

葉を打はべたらん

かこししかのミならす

桜さく春の日へしら雲

かゝらぬ梢もあらぬを

谷風のとと誘ひて遊に

せかるゝ花のうたかなと

あはれなれ時鳥の初音

めつらしう聞つるほどにいつ

しか夏なけてしけりあふ木

蔭に山水を結へばはらわたを

さく洗ひたるこゝろしていと

すゝしまた月雲のなかめ

も深き趣ありて此地へ幽

邃なる山かけなから手を拍へ

忽酒来り山海の珍味も心

のまゝなりかく四時の景色を

とりあつめたる処なれハ谷

の名のもまといへるも暮せ

し人の顔より名つけ初たる

にやあらむ

紅葉谷なる寂寥亭に

あそべる日酔のすさひに

琴香堂主人誌

資料館の活動

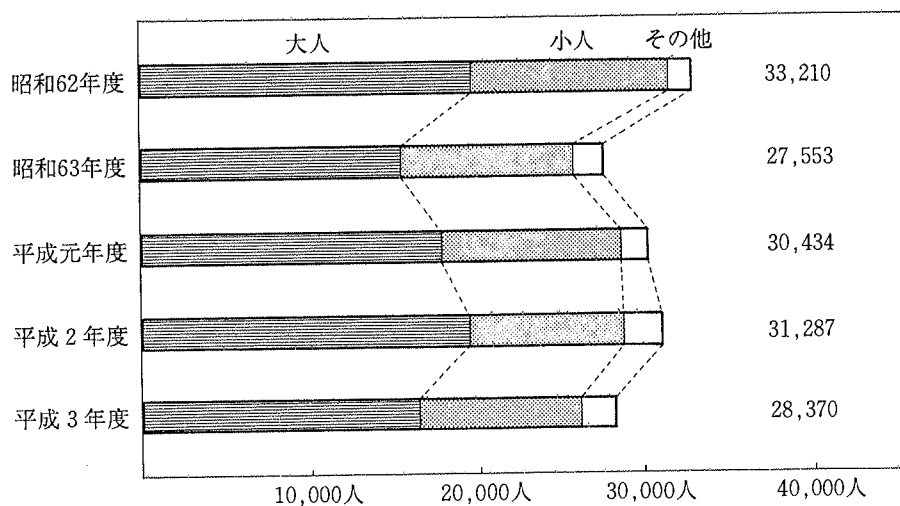
1.入館者数（平成3年度）

開館以来の累計 527,372

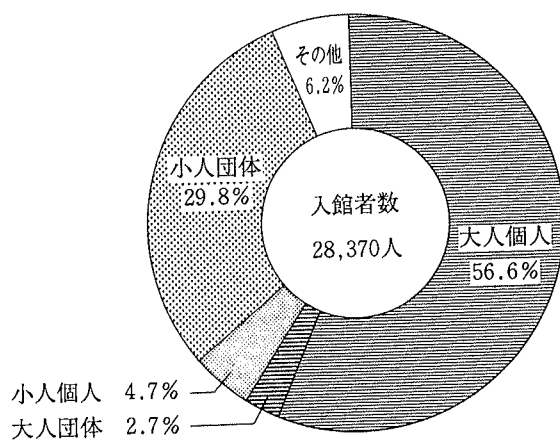
月	大人		計	小人		計	その他（無料）			合 計
	個 人	団 体		個 人	団 体		身障者	一 般	計	
4	1,426	4	1,430	148	1,341	1,489	4	160	164	3,083
5	1,895	181	2,076	109	2,951	3,060	41	420	461	5,597
6	1,026	44	1,070	16	1,619	1,635	15	169	184	2,889
7	1,172	5	1,177	90	87	177	2	67	69	1,423
8	2,681	34	2,715	529	0	529	20	83	103	3,347
9	1,381	4	1,385	41	236	277	9	47	56	1,718
10	1,323	172	1,495	14	1,310	1,324	25	186	211	3,030
11	1,278	279	1,557	28	679	707	32	135	167	2,431
12	451	4	455	11	7	18	5	10	15	488
1	921	0	921	82	9	91	7	30	37	1,049
2	777	0	777	34	0	34	5	114	119	930
3	1,728	50	1,778	219	229	448	10	149	159	2,385
計	16,059	777	16,836	1,321	8,468	9,789	175	1,570	1,745	28,370

*（小人は小・中学生，休館日は12月26日～31日）

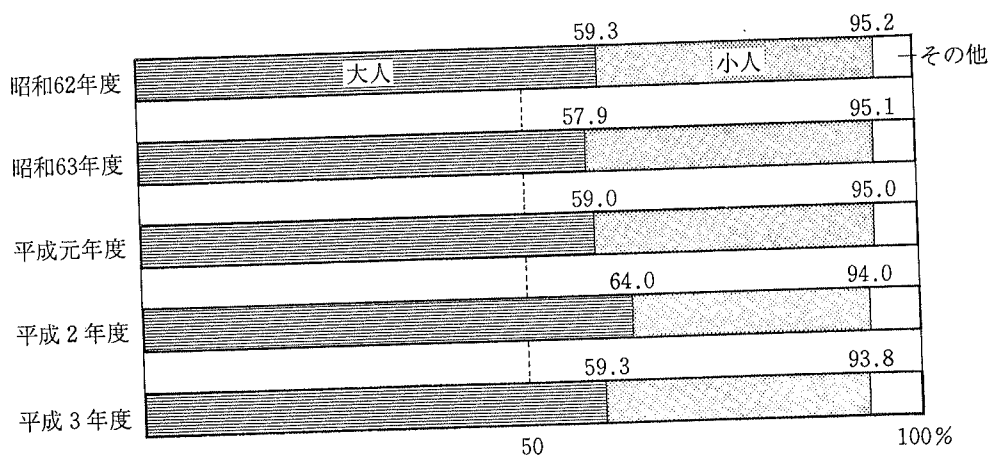
入館者数の推移（昭和62年度から平成3年度まで）



入館者の構成(平成3年度)



入館者構成の推移(昭和62年度から平成3年度まで)



2.年度別予算一覧

年度 節	昭 和 62年度	昭 和 63年度	平 成 元年度	平 成 2 年度	平 成 3 年度	備 考
	千	千	千	千	千	
報 酬	1,580	1,510	1,650	1,743	1,743	資料館協議会委員、館長報酬
賃 金	98	305	468	1,404	1,888	
報 償 費	25	5	25	10	10	展示資料借上謝礼など
旅 費	140	190	149	290	221	
需 用 費	4,446	4,069	4,132	6,805	6,048	消耗品費、光熱水費、印刷製本費など
役 務 費	482	765	741	647	686	通信運搬費
委 託 料	4,130	3,920	4,012	16,122	7,816	事務補助、管理保守、庭園手入れ委託料など
使用料・賃借料	349	160	199	434	399	複写機使用料など
工 事 請 負 費				390,000	423,000	補修工事費など
備 品 購 入 費	2,055	2,144	2,539	2,455	3,007	図書・展示資料等購入費
負担金補助・交付金	429	429	422	432	432	学会協会負担金、補助金など
公 課 費					9	
計	13,734	13,497	14,337	420,342	445,259	

(平成2年度工事請負費は、平成3年度へ繰越)

3. 資料収集

(1)寄贈資料

資 料 名	寄贈者名	数量
明治天皇肖像	天 野 保 師	1点
石臼	水 島 勝 良	1 点
キマワシ	山 樋 恒太郎	2 点
トビグチ	〃	1 点
ハチグワ	〃	1 点
カワヘギ	〃	1 点
ボウトウクギ	〃	2 点
手鏡	〃	1 点
机	〃	1 点
火鉢	山 上 昇	1 点
柳行李	〃	1 点

資 料 名	寄贈者名	数量
亥の子石	加 木 組	2 点
石標	(採 集)	1 点
仮屋売渡証文	佐々木 成 三	31点
神棚	〃	1 点
守札	〃	3 点
七福神像	〃	16点
宮島焼茶碗	〃	3 点
宮島焼調味料入	〃	2 点
平鉢五枚入	〃	1 点
重箱	〃	1 点
膳	〃	1 点

(2)購入資料

資 料 名	数量
厳島清盛初詣の図	1 点
源平雪月花	1 点
厳島案内記	1 点
厳島写真帖	1 点
厳島社頭之図	1 点
安芸国厳島真景之図	1 点
厳島案内記	1 点
厳島名所案内記	1 点
厳島絵葉書	4 点
厳島八趣	6 点
厳島絵葉書	8 点
宮島富くじ合鑑紙	55点
宮島芝居絵	1 点
宮島芝居絵	1 点
宮島芝居口上絵	1 点
「芸備俳諧資料」	1 点

資 料 名	数量
梟日記	1 点
厳島	1 点
厳島社頭図	1 点
厳島実地真景之図	1 点
厳島実地真景之図	1 点
厳島社頭図	1 点
厳島宮路之枝折	1 点
厳島みやげ	1 点
宮島絵葉書	6 点
厳島神社図	1 点
宮島彫 重箱	1 点
厳島の図	1 点
厳島名所真景之図	1 点
厳島名所	1 点
厳島名所	1 点
厳島名所図	7 点

4. 調査研究等

平成3年4月12日	資料調査（広島市、市立中央図書館）
4月16日	博物館等視察（広島市）
4月20日	博物館等視察（防府市）
5月26日	資料調査（三次市、県立歴史民俗資料館）
6月17日～18日	資料調査（東京都、東京国立文化財研究所・文化庁）
7月17日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会（三次市）
8月2日	資料調査（山口県由宇町）
10月8日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会理事会（三次市）
11月7日～8日	日本博物館協議会指導者研究協議会（堰原市）
11月26日～27日	広島県歴史民俗資料館等連絡協議会（竹原市）
平成4年1月9日	資料調査（広島市、桃源古美術店）
2月5日	資料調査（三原市、中弘文氏）
3月14日	博物館等視察（山口市）
3月16日	博物館等視察（福山市）
3月25日	博物館等視察（松山市）
3月27日	博物館等視察（出雲市）

5. 展示普及等

平成3年5月13日	「誓真像」、杓子関係資料の撮影（TSS）
7月23日	資料調査（宮島小学校）
8月20日	資料調査（上田篤氏）
9月25日	「平清盛像」、「宮島御祭礼之図」写真の貸出（風土社）
9月25日	宮島細工関係資料の撮影（京都映画）
9月27日～28日	〃
10月31日	芝居関係資料の調査（早稲田大学演劇博物館）
11月15日	絵葉書等の撮影（広島県）
11月21日	「厳島由来記」、「宮島膝栗毛」、「厳島絵図」の撮影（世田谷区立郷土資料館）
12月2日	保存民家の撮影（マイホームプラン社）

平成4年3月4日 「厳島図」の撮影（広島県立美術館）
3月25日 「御島廻之図記」写真の貸出（至文堂）

6. 施設の整備

平成4年3月9日 「宮島歴史民俗資料館収蔵庫」起工（松本建設、中石産業）

7. 歴史民俗資料館協議会

平成3年度資料館協議会委員（◎は委員長、○は副委員長）

後藤陽一	広島大学名誉教授	瀬田律義
定宗一宏	広島文化女子短大教授	宮郷安輝
米田 仁	広島県教育委員会文化課長	小西延穂
野坂元良	厳島神社宮司	平野 勝
◎岩村益文		山本壮一 宮島町議会議員

木村 力

平成3年度資料館協議会

平成4年3月26日

協議内容

1. 「宮島歴史民俗資料館収蔵庫」建設について
2. 「宮島歴史民俗資料館改修に係わる調査報告書」について

8. 購入図書・受贈交換図書

購入図書

編著者名	書名	出版
小松茂美	平家物語絵巻 巻第6～巻第11	中央公論社
千代田町	千代田町史 近世資料編上・下	千代田町
市村忠司	明治の厳島	市村忠司
	国史大辞典 12	吉川弘文館
真下三郎	広島県の囃し田	溪水社
広島県	広島県移住史 資料編	第一法規

	編年差別史資料集成 第18巻	三一書房
ザイコルマン他	博物館の防虫対策引き	淡交社
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第16集～第30集	第一法規
岩崎文人	広島の文学	溪水社
「中国博物館総覧」刊行委員会	中国博物総覧 上巻・下巻	「中国博物館総覧」 刊行委員会
新村出	広辞苑 第4版	岩波書店
厳島神社修理委員会	国宝並びに重要文化財建築遺物昭和修理総合報告書	厳島神社修理委員会
東京大学史料編纂所	毛利家文書 1～4	東京大学出版会
	歌舞伎評判記集成 第2期第16巻	岩波書店

逐次刊行物

歴史学研究	611～622
日本歴史	515～526
地方史研究	209～212
広島県文化財ニュース	128～131
月刊文化財	331～342
博物館研究	第26巻4号～第27巻3号
文化財の虫菌害	第21号～第22号

受贈図書

〔会津民俗館〕

会津民俗館だより 第23号～第24号

〔赤穂市立歴史博物館〕

年報 1989

年報 1990

赤穂市立歴史博物館常設展示図録

赤穂のやきもの

赤穂市40年のあゆみ

〔飯塚市歴史資料館〕

飯塚市歴史資料館年報 8

飯塚市歴史資料館年報 9

飯塚市歴史資料館 収蔵資料目録

資料館だより No. 1

〔石川県立歴史博物館〕

石川県立歴史博物館年報 No. 2

石川県立歴史博物館紀要 第4号

石川れきはく No. 18～No. 22

〔出雲玉作資料館〕

資料館ニュース 第17号

〔厳島神社〕

厳島神社国宝並びに重要文化財建造物昭和修理総合報告書（抜粋）

〔茨城県立歴史館〕

茨城県立歴史館報 18

〔岩手県立農業博物館〕

農業博物館だより No. 50～No. 51

〔大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館〕

宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1990

豊後国都甲荘 4

USA SITE MUSEUM NEWS No. 25 ~ No. 27

〔大阪市立博物館〕

大阪市立博物館報 No. 30

〔王舎城美術博物館〕

館蔵選

〔大田区立郷土博物館〕

大田区立郷土博物館紀要 創刊号

絵画にみる海苔養殖

鍋釜

郷土博物館だより 24号

博物館ノート No. 49~No. 60

〔大津市歴史博物館〕

博物館だより 第5号~第8号

〔岡山県立博物館〕

研究報告 12

研究報告 13

岡山県立博物館だより 第36号~第37号

〔お茶の水女子大学学芸員課程〕

博物館実習報告 第7号

〔尾道市教育委員会〕

尾道遺跡 1989

〔尾道市立美術館〕

ターナー水彩画展

安井賞展 第34回

世界を染める「皆川泰蔵展」

〔香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館〕

資料館だより 第32号~第33号

〔家具の博物館〕

博物館だより No. 20~No. 21

〔神奈川大学日本常民文化研究所〕

歴史と民俗 7

歴史と民俗 8

要覧 1991

民具マンスリー 第24巻第1号~第24巻第12号

〔神辺町教育委員会〕

茶山詩話 第1集

〔神辺町立歴史民俗資料館〕

歴史民俗資料館資料目録 IX

〔北九州市立考古博物館〕

弥生古鏡を掘る

〔北九州市立歴史博物館〕

北九州市立歴史博物館年報 14

関門の潮流

広寿山の文化財産 IV

博物館だより 12

〔京都国立博物館〕

平成元年度京都国立博物館年報

京都国立博物館概要 平成3年度

〔京都市歴史資料館〕

京都市歴史資料館年報 No. 9

京都市歴史資料館紀要 第8号

京都市の文化財 新指定の美術工芸品

公家・武家・寺家

京都市史編さん通信 No. 229~No. 230

〔京都府立丹後郷土資料館〕

丹後郷土資料館報 第10号

ふるさとの塩づくり

丹後郷土資料館だより 第21号

〔呉市入船山記念館〕

館報いりふね 第3号

〔国立民族学博物館〕

国立民族学博物館国内資料調査委員調査報告
集 12

〔国立歴史民俗博物館〕

中・近世の絵画
暮らしの中の灯火
中世の武家文書
日本建築の装飾彩色
変身する
描かれた江戸

〔埼玉県立博物館〕

埼玉県立博物館館有資料目録 VII
音のかたち
博物館だより 73号～76号
さいたまのはくぶつかん 第120号

〔埼玉県立歴史資料館〕

館報 第12号

〔佐賀県立九州陶磁文化館〕

九州陶磁文化館年報 No. 10
セラミック九州 No. 23～No. 24

〔サントリー美術館〕

サントリー美術館ニュース 第116号～第123号

〔新市町立歴史民俗資料館〕

新市町文化財調査報告 3
新市町文化財調査報告 4
中世の山城
古代の色を染める

〔真珠博物館〕

御木本真珠島40年の歩み
1991年新収集品展

〔世田谷区立郷土資料館〕

世田谷区史料叢書 第6巻

多摩川流域の古墳 II

大場美佐の日記 (3)

資料館だより No. 14～No. 15

〔瀬戸市歴史民俗資料館〕

瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 X
瀬戸の歴史

〔園田学園女子大学近松研究所〕

近松研究所紀要 第2号

〔大聖院〕

霊峰 第323号～第334号

〔竹中大工道具館〕

竹中大工道具館研究紀要 第3号
竹中大工道具館収蔵品目録 第3号

〔丹青総合研究所〕

ミュージアム・データ No. 15～No. 17

〔千葉県安房博物館〕

東北地方の漁具
安房博物館報 第49号～第52号

〔千葉県立大利根博物館〕

調査研究報告 第4号
水郷の鳥と魚百話

〔千葉県立総南博物館〕

総南博物館報 第46号～第48号

〔逋信総合博物館〕

一般資料目録
駅通紀事編纂原稿
正院本省郵便決議簿第1号
資料図録 No. 41～No. 44

〔鳥取県立博物館〕

鳥取県立博物館研究報告 第28号
民俗資料目録 5

郷土と博物館 71号～72号

〔**豊田市郷土資料館**〕

猿投神社と中世資料

豊田市の農村舞台

松平太郎左衛門家文書 1

述懐日記

梅坪遺跡第4次調査概要報告

〔**長崎市立博物館**〕

長崎市立博物館報 第31号

〔**名古屋市博物館**〕

名古屋市博物館だより 第79号～第84号

〔**奈良県立民俗博物館**〕

民俗博物館だより 59号

〔**新潟県立美術博物館**〕

新潟県立美術博物館報 Vol.13

〔**日本浮世絵博物館**〕

北斎

〔**日本のあかり博物館**〕

博物館ノート No. 26～No. 27

〔**日本民家集落博物館**〕

民家集落ふるさとだより No. 11

〔**沼津市歴史民俗資料館**〕

沼津市博物館紀要 15

図説沼津の歴史

風の世界

資料館だより 96～101

〔**根室市博物館開設準備室**〕

根室市博物館開設準備室紀要 第5号

〔**東広島市教育委員会**〕

史跡三ツ城古墳一保存整備事業第4年次発掘

調査概報

史跡三ツ城古墳一保存整備事業第5年次発掘

調査概報

〔**平塚市博物館**〕

平塚市博物館年報 No. 14

平塚市博物館研究報告 No. 14

〔**広島県企画振興部**〕

土地分類基本調査 木都賀・三段峡

〔**広島県草戸千軒町遺跡調査研究所**〕

草戸千軒町遺跡 1989

草戸千軒町遺跡 1990

草戸千軒 No. 202～No. 213

〔**広島県瀬戸内高校**〕

宮島しゃもじ

〔**広島県埋蔵文化財調査センター**〕

ひろしまの遺跡 第41号～第45号

〔**広島県民文化センター**〕

月刊けんみん文化 1991年4月号～1992年3

月号

〔**広島県立生涯学習センター**〕

まなびねっと No. 47～No. 48

〔**広島県立図書館**〕

郷土資料目録 第37号

瀬戸内の島に関する所蔵図書目録

〔**広島県立文書館**〕

吹寄青枯集

広島県立文書館事業年報 第2号

広島県立文書館規程集

広島県立文書館だより 第2号

〔**広島県立美術館**〕

広島県立美術館年報 平成元年度～平成2年
度

探美 No. 58～No. 60

〔**広島県立歴史民俗資料館**〕

江の川の漁撈 昭和58年度

江の川の漁撈 昭和59年度

江の川の漁撈 1991

みよし風土記の丘 No. 42～No. 44

歴風ニュース 第1号～第3号

〔広島県立歴史博物館〕

備後表

瀬戸内の中国陶磁

広島県立歴史博物館ニュース 第6号～第7号

〔広島市教育委員会〕

石仏石神等民間信仰調査報告書

〔広島市郷土資料館〕

広島における綿づくりとその技術

下駄づくり

ひろしま郷土資料館だより 第19号～第22号

〔広島市現代美術館〕

広島市現代美術館ニュース 第5号

〔広島市公文書館〕

広島市公文書館紀要 第14号

図書目録 IV

役場文書目録 補遺編

戸坂村史

中山村史

井口村史

〔広島城〕

広島城の収藏品

漆芸一國齋

〔広島民俗学会〕

広島民俗 第35号～第36号

〔福井県立博物館〕

福井県立博物館紀要 創刊号

ふくいミュージアム No. 19

〔福岡市博物館〕

福岡市博物館研究紀要 創刊号

昭和62年度収集収藏品目録

昭和63年度収集収藏品目録

Facta No. 2～No. 6

〔福島県歴史資料館〕

研究紀要 第13号

歴史資料館収蔵資料目録 第20集

〔福山市立鞆の浦歴史民俗資料館〕

資料館だより 第7号～第8号

〔福山市立福山城博物館〕

藤井松林

〔ふくやま美術館〕

ふくやま美術館所蔵品目録

〔府中町歴史民俗資料館〕

府中町歴史民俗資料館報 昭和63年度

府中町歴史民俗資料館報 平成元年度

〔ペンタックスギャラリー〕

Pentax Gallery News No. 84～No. 87

〔松本市立博物館〕

あなたと博物館 No. 65～No. 67

〔松山市立子規記念博物館〕

松山市立子規記念博物館年報 9

子規から茂吉へ

子規博だより Vol.11-1～Vol.11-4

〔宮城県立東北歴史資料館〕

東北歴史資料館年報 平成2年度

〔毛利博物館〕

毛利氏の女性

〔山口県立山口博物館〕

館報 14

山口県立山口博物館研究報告 第17号

山口県の自然 第51号

〔山田有利〕

古文書に偲ぶ矢野城の戦い

〔横浜開港資料館〕

横浜開港資料館紀要 第9号

横浜会所日記

横浜開港資料館蔵 芝居番付目録

横浜開港資料館蔵 新聞・雑誌目録

資料が語る横浜の百年

開港のひろば 第34号

〔読谷村立歴史民俗資料館〕

読谷村立歴史民俗資料館年報 第16号

読谷村立歴史民俗資料館紀要 第15号

資料館だより No. 25

町史のあゆみ

1. 日誌から (1992年)

平成4年1月21日 『けんみん文化』の取材に協力する(「ふるさとの文化散策82」5月号)。

25日 菩提院跡出土資料の整理。

編さん委員頼祺一氏・専門委員三宅紹宣氏来室し、『地誌紀行Ⅰ』の校正作業を行う(～26日)。

29日 菩提院跡出土資料の整理。

楠見久氏、砲台調査のため来室。

2月3日 郷土学習講座『厳島道芝記の世界』。

19日 『民俗編』専門委員木谷昌光氏、「神社の年中行事」打ち合わせのため来室する。

20日 宮島で本年初めて雪が降る。

21日 菩提院跡試掘作業の最終面の写真撮影を行う。

26日 職員同和研修に参加する。

3月2日 郷土学習講座『厳島道芝記の世界』。

26日 是光吉基氏・杉山氏、弥山の調査を行う。

27日 山陽女子短期大学池田道人氏来室。

4月5日 大内文化探訪会来島。

6日 郷土学習講座『厳島道芝記の世界』。

9日 宮島奉行について山下中氏来室する。

10日 小川清処について廿日市市江崎氏から問い合わせがある。

18日 編さん委員頼祺一氏、来島調査を行う(～19日)。

29日 編さん委員頼祺一氏、香川県金刀比羅宮図書館で資料調査する(～30日)。

5月6日 駒が林西で山火事発生し、約7haを焼く。

7日 広島修道大学にて「厳島の文化財」の講義をする。

9日 菩提院跡出土資料の接合。

10日 広島修道大学学生の現地見学を行う。

12日 郷土学習講座『厳島道芝記の世界』。

21日 大野町婦人会の島内研修を行う。

25日 千代田町史編さん室六郷寛氏、芸備日々新聞フィルム返却のため来室。

- 27日 厳島神社福田道憲氏を訪ね、文化財リストの照合を行う。
- 6月3日 中央公民館郷土学習講座『知ろう宮島の歴史とロマン』が始まる。第1回は「宮島で考える！身近なところから」を講演する。
- 5日 杉の浦公民館講座『知ろう宮島の歴史とロマン』が始まる。第1回は「宮島通史」について講演する。
- 人事院職員研修会で「宮島の歴史について」講演する。
- 10日 『資料編 地誌紀行Ⅰ』一部搬入を始める。
- 11日 大野町和光苑にて「清盛と宮島」について講演する。
- 12日 杉の浦公民館講座、第2回「宮島と厳島神社」。
- 13日 第67回文化財臨地研究会が宮島町で行われる（～14日）。
- 19日 杉の浦公民館講座、第3回「宮島と日本三景」。
- 23日 大竹市小方公民館婦人教室の島内研修を行う。
- 25日 全国私立幼稚園大会の海上学習・島内研修を行う。
- 26日 杉の浦公民館講座、第4回『芸州厳島図会』の世界」。
- 推理小説作家内田康夫氏、取材協力のお礼のため来室。
- 7月1日 中央公民館郷土学習講座、第2回「広島と管絃祭」。
- 3日 『資料編 地誌紀行Ⅰ』搬入する。
- 杉の浦公民館講座、第5回「宮島と文化財」。
- 6日 郷土学習講座『厳島道芝記の世界』。
- 山口県周東中学校PTA、来島研修。
- 9日 町史の頒布方法について出版社と検討する。
- 10日 杉の浦公民館講座、第6回「宮島の民俗」。
- 16日 厳島管絃祭。
- 24日 是光吉基氏、『石造物編』の調査のため来室。
- 28日 石造物編の写真撮影を行う（～30日、布野村・三原市ほか）。
- 8月4日 台風9号接近する。
- 5日 是光吉基氏、『石造物編』の調査のため来室。
- 8日 台風10号接近する。
- 17日 是光吉基氏、『石造物編』の調査のため来室。
- 28日 是光吉基氏、『石造物編』の調査のため来室。
- 30日 広島市八幡コミュニティーセンター「ぐるっと宮島再発見」。
- 9月2日 広島大学学生惣城氏、卒論調査（景観について）のため来室。

中央公民館郷土学習講座、第3回「公園と文化財」。

5日 出土資料の整理作業を行う。

7日 町史の頒布方法について教育委員会内で打ち合わせる。

郷土学習講座『厳島道芝記の世界』。

18日 町史の頒布方法について検討を行う。

19日 出土資料の整理作業を行う。

22日 森鷗外展取材のため三越館本直幸氏・NHK小川亮氏来室。

26日 出土遺物の整理作業を行う（～27日）。

10月4日 是光吉基氏来室し、『石造物編』の編修打ち合わせを行う。

5日 連歌関係資料の整理を行う（～9日）。

7日 中央公民館郷土学習講座、第4回「町のくらし」。

12日 町史の頒布のついでに教育委員会内で打ち合わせる。

24日 出土遺物の整理を行う。

26日 町史頒布の準備作業に入る。

28日 山口県和木町コミュニティーセンターで「宮島について」講演する。

31日 出土資料の整理を行う。

11月2日 『宮島町史 資料編・地誌紀行Ⅰ』の頒布を始める。

5日 是光吉基氏、『石造物編』の調査のため来室する。

6日 西広島タイムスで『宮島町史』の刊行が報じられる。

7日 中国新聞で『宮島町史』の刊行が報じられる。

出土遺物の整理を行う。

9日 郷土学習講座『厳島道芝記の世界』。

10日 是光吉基氏、『石造物編』の調査のため来室、トレース・入稿日程などを打ち合わせ印刷準備を始める（～11日）。

18日 中央公民館郷土学習講座、第5回「祭りと商い」。

19日 広島修道大学「総合コース」講義。

20日 毎日新聞で『宮島町史』の刊行が報じられる。

28日 出土遺物の整理を行う。

12月2日 中央公民館郷土学習講座、第6回「住いの習俗」。

7日 郷土学習講座『厳島道芝記の世界』。

11日 中国新聞文化面で『宮島町史』が紹介される。

自治日報で『宮島町史』の刊行が報じられる。

12日 出土資料の整理を行う。

2. その他

町広報紙への『町史の窓』の連載を行う。松江藩の桃節山の「西遊日記」を題材にして、武士の目を通して見た旅のあり方を紹介している。

3. 宮島町史の発刊

『宮島町史 資料編・地誌紀行Ⅰ』が発刊されました。第2巻の『資料編・石造物』もまもなく配本の予定です。

購入を希望される方は、宮島町史編さん室(0829)44-2891までお問い合わせください。

○宮島町史 全17巻の配本予定

《資料編》		《特論編》		《通史編》
文芸と芸能Ⅰ	第6回配本	自然と人間	第5回配本	古代 中世 近世
文芸と芸能Ⅱ		信仰		近代・現代
地誌紀行Ⅰ	既刊	民俗	第4回配本	
地誌紀行Ⅱ	第7回配本	建築	第3回配本	
地誌紀行Ⅲ		美術工芸	第8回配本	
編年文書				
諸記録抄				
近現代資料				
石造物	第2回配本			
紙背文書				

○宮島町の既刊書籍

厳島道芝記	昭和46年	棚守房顕覚書	昭和50年
宮島の古建築	昭和54年	高倉院厳島御幸記	昭和54年
芸州厳島図会	昭和48年	いつく島の史跡名勝	昭和55年
厳島の自然	昭和50年		

元文四年仲秋

宮岳

玉壺堂藏版

八景集終

嚴寫靈場 美景瞻望

金聲歌曲 玉振詩囊

教余摹寫 恭敬神光

俯揮禿筆 實恐誠惶

洛下龜田窮樂書

此嶋敬拜の比立なから法楽に申侍る

鹿の子に神の手種や奈曇

草刈の鹿に馴たる昼寐哉

鹿啼や枝木拾ひの谷移り

膝長ケの汐踏込や鹿の恋

塵拂ふ横日拙ししかの原

御笠濱

雪ふれハ海も一なて大鳥居

季を畳む御笠の濱や六の花

濱の雪うねり出来けり一日南

奈良八月爰そ御笠の雪滑

有浦

沖に柳散葉や有の浦子共

類船の歩板も涼し有の浦

春待や新苔くはる催合舟

領巾振や袖に紅葉有の浦

稲妻やつま乞歩行舟所帯

風之

左流

冬秀

梅従

三惟

梅従

吟枝

冬秀

浪花
貞沖

嵐梅

浪華
三惟

梅従

貞沖

蛙中

神鴉

七浦のさくらを廻る鴉かな

むは玉や雪に軒借る神鴉

花柳左右に眠る鴉かな

五鴉や平良の古家の冬作り

嚴鴛行脚年々不同

松の雪海も彩色や嚴鴛

我宿を出てこそ知れ花の宿

さし汐そ鳥居の根なる和布ハ刈な

嶺に仰き浦にふしそ郭公

鹿ともや磯に吹る、角の跡

廻廊に夜の明やすし嚴鴛

燈籠やいつくしま山浪の花

硝子の國や若葉の嚴嶋

妻と寐る鹿を月見の片隣

真之

嵐梅

梅従

風之

洛下
重瀬

難波
諷竹

洛下
我黒

浪花
天垂

惟然

凉兎

支考

露川

淺生

冬梅やわるさもしらす夕鳥

二鴉實も葉も神の秋なから

雪とける峯や案内の神からす

御鴉や麓に霞む院の棟

子に譲る嶋や若葉の神鴉

神の綱付や霞の友からす

つゝく注連雲につれたり二羽鴉

涼しさや登る鳥喰の峯の舞

明燈

明燈や佐保姫かくる玉の帯

御灯や闇に満込波のひた

明燈や野分くの汐の畝

明燈や雲に星なし春の汐

夜の虹回廊照て浪涼し

御燈や銀河の落て海の面

御燈や波にこぼるゝ梅の花

大元

日詣の櫻かたりや目分量

乳の黒む花の夕日や嶋乙女

梅楚

伯風

赤間関
薄遊

蓬雨

芳里

直遊

満志

路圭

櫻花のんこ編笠六部かな

滝宮

宮立を錦に風の蜚かな

灌筋や蜚追ハゆる草の風

滝姫の織や蜚を緯の糸

手に馴つく團扇内侍の蜚哉

鏡池

月澄や水に疎きハ亭主顔

鏡池藻に咲髭や月の照

影きよし桂男の飯館

月落て池は輪に見る心垢離

波つくる風もをやむや池の月

谷原

嗅艸もあらむや鹿の産こもり

ともし火の花折敷や鹿の聲

旅人の足とはくや鹿の群

梅従

浪花
三惟

冬秀

管月

梅従

梅従

浪花
真之

管月

風之

浪花
桂舟

浪下
蛙中

嵐梅

浪下
百芽

浪下
風之

浪花
左流

戀も舟にまよふや有の浦
 女中舟うくひす乗ルや有の浦
 はつ鴈や一揖くれて有の浦
 船の火の夜毎に増や五月晴
 舟に鳴土産虫籠や有の浦
 汐曇帆や紛込む道者舟
 うの花や浦はしらけて寄する舟
 走り帆や朧色とる有の浦
 星の夜や板うち渡す舟隣
 有浦や神の出立の御供舟
 うくひすや明行舟の通ひ樽
 梅さくや下駄賣招く舟の鱸
 百舟を垣穂に繋く雪見哉
 月花の枕言葉や舩行脚
 朧夜や隣替たる舟の恋
 下る帆やまつ年玉の浦届け
 鯉の膝直す若葉や舩屏風
 帆柱の木の間の月や有の浦
 寺詣舟に涼むや青櫓
 片舟のなれこ呼なり春の雨
 舟蠅もせゝらて涼し嶋の市

筑前杷木 風芦
 舎乙
 可文
 筑前赤間 里舟
 風猪
 筑後善導寺 舩羽
 市山
 雪刀
 木而
 野紅
 豊後玖珠 一朶
 全杵築 野芳
 利錐
 三雅
 肥後熊本 十雨
 琪滴
 肥後熊本 程々
 長州赤間関 芳里
 里哇
 赤間関 伯風
 石劔濱田 梨明

船主ハ神そ有浦ほとゝきす
 いさは迄よせ場争ふ浦の冬
 有浦や涼ミに誘ふ舩傳ひ
 神鴉
 代継子のうの花守や神鳥
 峯ひとつ雪吹行やかミ鴉
 七浦の花にあそふや神からす
 手の首ハ霜の飴や神鴉
 山守の寒さ知る日や神からす
 虫出しは晴ぬ御山の朝からす
 風薫る翼や月の神鴉
 槇若葉三年鴉や神の山
 麦秋に聲なけかしそ神鴉
 神かすみ二年鴉や羽のいさミ
 梅咲や古巢疵なき峯鳥
 夕立や合点顔なる鴉二羽
 宮鳥愛やむつかし冬木立
 山寂ひて番ひ鴉や神の留主
 菜莢取の雲の枝折や朝鴉
 昨や子鴉はさむ青葉垂

備中 満志
 杉助
 直遊
 可文
 素蝶
 遊木
 杏雨
 誘甫
 緑紫
 梅和
 浮艸
 万李
 桃里
 里舟
 木而
 雪刀
 秋虎
 古桂
 三雅

鹿鳴や宿に筆なし谷かハラ
鹿の敷草またらや谷かハラ

長崎
野頂
路圭

足拔や鳥の蓑毛も雪の濱

雪や月鳥居を神の遠目鏡

松明のあかりハ狭しはまの雪

里哇
杉助
備中玉島
文州

御笠濱

浪境ひ御濱ハひとつ今朝の雪

友まつや雪に和波ある濱庇

日妙に二重の雪や御笠濱

浪遠き暮や御笠の雪の照

雪はれの沖一面や御笠濱

流れよる礫木も雪や御笠濱

足半で跡追ふ雪や御笠濱

波越にさし後る、や雪の濱

浪色ハ雪吹かくれや御笠濱

濱形りを合る雪や月かしら

濱先におくる、鴈や雪の宿

箒木に掃世話もなし濱の雪

雪の日や見る物失て汐の音

鳥はかり外のみ物か濱の雪

空ふたへ枝に二重や濱の雪

引雲や濱ハ御笠の雪かくれ

跡や引海士のたく縄雪の濱

単雨

鳧牧

相岡
池水

知柳

雨庭

舎乙

吉木
潜子

里因

時賞

木而

善導寺
龜毛

茅呂

梅楚

素朝

肥後熊本
琪滴

毛雨

三雅

有浦

幕張て舟ても待かほと、きす

艦にさす梅の土産や有の浦

船に買年取物や有の浦

月涼し舟ハ百里の市のはれ

舟呼や禿か朝の門砦

短夜や酒買船の自分酔

苦舟や雪の間置有の浦

追風に水主の暇や船の雛

紅葉焚舟のあそひや有の浦

端舟ハ躍迎ひや盆のうら

初汐や隣の違ふ泊り船

有浦や碇も凍るけふの雲

聲からす踊師匠や隣り舟

能雨に伽待かほやか、り船

泊り帆や内侍の文の扇隈

百船に七夕船や出挑灯

筑前福岡
万李

杏雨

未雷

鳧牧

都外

福岡
青宇

まん

我及

金子

交和

蘭陵

鷺岡

市杉

遊木

浦之

猪路

乳にすかる鹿子露けし谷かハラ
 葛ハラや足もつれして鹿の声
 鹿鳴や往来さためる草のハラ
 今朝や秋常来る鹿も鳴初し
 鹿鳴や角さし上て防風ハラ
 舟守の風見る草や朝の鹿
 鹿鳴や御戸守る役も谷か原
 鹿間の洗ひ布子や嶋傳ひ
 杣か飯のそくや鹿の谷かハラ
 養父入や鹿の子に暮て海士の列
 餌替りに子を守る鹿や谷か原
 飛鹿や小石をはぬる爪力
 谷か原真向横向鹿の群
 松も色うつしの露や鹿の声
 早出立目ハきよろ／＼と鹿の声
 稲妻に飛行鹿や谷かハラ
 鹿の音について落るや一葉桐
 柵宜達の暇歩行や鹿の聲
 漁火は消て鹿聞岡野かな
 行違ふ鹿にましりて谷か原
 鹿の聲次第立けり谷か原

未雷
 巢雨
 浮艸
 福岡 知柳
 野藿
 者乙
 和蜀
 山歩
 芝芳
 五雷
 澤翠
 池里
 猪路
 全久喜宮 里因
 猪路男十一才 温吉
 全長洲老人 友舩
 素蝶
 素元
 筑前拾土 紺葉
 全東崎 風猪
 雪刀

伴なふて鹿に主つく子共哉
 鹿鳴や陸に片日の旅木履
 落葉吹旅寐の伽や鹿の聲
 妻鹿の袂に鳴や紅葉傘
 鳴鹿も角幾またの思ひ草
 角みかく鹿や岡Pの松の皮
 囉ひ乳の一谷遠し鹿の声
 挑灯に附て啼なり鹿の原
 鹿の音や番柵宜直す膝の向
 霧雨の宮を抜けり鹿の聲
 笈に見る一つ佛や谷の鹿
 鹿原や小雨にくるふ声もやひ
 乞食の昼間眠やしかの床
 しか鳴や里ハ着残す夏衣
 鹿鳴や錦染足す谷かハラ
 一霜は履にも輕し鹿の聲
 角伏せて風に游くや谷の鹿
 松風や鹿の音つたふ谷か原
 鹿の音の曙らし、やつかハラ
 頭に高う吹れて落す鹿の角
 ほろ雨も谷一切やしかの聲

木而
 杜夕
 市山
 知李
 魯用
 野紅
 故扇
 三雅
 肥後熊本 梅楚
 毛雨
 程々
 琪滴
 十雨
 岱下
 長州赤間関 薄遊
 百櫻
 里哇
 直遊
 備中鴨方 正房
 和友
 季吹

星沈む水の埃りやとお蛸

むれ替る蛸のせきや瀧の刻

下駄音に水を離るゝ蛸かな

天津星蛸さそふや瀧の宮

滝越えて雲にも入かとお蛸

求聞持の声にとハしる蛸哉

若竹を泊りに瀧の蛸かな

滝形りに群て渡りし蛸かな

宮の名や瀧を守りの寄り蛸

蛸かな山吹比のたきの宮

ちる水の増や蛸の瀧の宮

切ぬさの蛸に散るやたきの宮

蛸見や瀧に模様をつくも髪

水飛て樹にも馴染ぬ蛸かな

鏡池

なたれ木の陰を雲間や池の月

残葉や月の蓋するかゝみ池

望月や神馬もいさむ鏡池

朝月に一葉くや池の底

鮎の名に遊ぶ川有けふの月

木而

為雅

秋虎

倫婦

利錐

鯉木

故扇

素朝

州用

可環

直遊

杉助

和友

李吹

嵐雨

まん

計圭

弁水

交和

肌于入月の力や池の照

待月のいつよりや待浪の面

月照るや水の澄なき鏡池

旅つれや月待池の丸ひたい

月の秋旅に驚けかゝみ池

汐時の目利や月の池の隈

鳥の登に受て手向よ月の池

秋深く汲はや池の月の味

暮かゝる月に映ありかゝみ池

旅癖や池の月夜の梓腰

龜刻る魚の尾ハなし秋の月

萍に諸手さけけり秋の月

撰ハれし目も誰彼の月の池

年半池に落けり月の照

此嶋の玉しる見せむ池の月

月粧ふ山や紅粉さす鏡池

池の月今宵や神子の鏡觸

水の皺伸や鏡の月の照

谷原

鹿原や枝舟着る獨活堀

秋里

池里

都外

杏雨

何木

市山

雪刀

而后

木而

知李

三雅

毛雨

梅楚

里畦

杉助

和友

可環

李吹

杏雨

大元

菓子賣の宮て年寄櫻哉

おほもとの行脚一日や初さくら

額突や旅のいさみもはつ櫻

波も花も鳥居の苦や初櫻

茶の塘は祢宜か手まめや初櫻

大元やさくらにひゆる朝掃除

大もとや櫻に暮し桑の杖

朝ハまた波の幣有り初櫻

櫻見や藻屑しからむ石の間^{ヒマ}

夕和波や船幕駁る宮さくら

櫻より着初る笠や杜道

若午時や櫻音なし神子の鈴

さくら咲花表ハ深し汐くもり

大元やさくらに移る朝の雲

八重の潮沸や櫻の雲一重

さしあて、先大元のさくらかな

波煙旅笠連の櫻かな

浦風や咳切れて初さくら

神風は嵐の外のさくら哉

杖たのむ玉垣白し初さくら

杏雨

^{博多} 鼠雨

鳧牧

まん

^{福岡} 兆虎

何木

全子

尺芦

梅鳳

梅和

兎角

^{全貞連} 秋里

宇麥

^{福岡} 計圭

^{筑前肥前} 猪路

風芦

渚叟

浦之

為敲

^{筑後塩足} 市山

灘越すや嶋八日和の遠櫻

綱初穂そろゆる贅や初さくら

いつの世の神の見込や花櫻

大元や齊たけ行初さくら

一めぐり嶋の袖ほす櫻かな

初さくらもふ來て直る芝の猿

浪に浮嶋の夕日や初さくら

神むすひまつ鳥居から松櫻

鶴の子を祢宜のひろめや櫻狩

滝宮

瀧音や蛍の倍も常流れ

放しやる袖の蛍や瀧戻り

葉屑ハ蛍筏や瀧流れ

水玉は朝の蛍か瀧の宮

群餘る瀧の蛍や祢宜の床

すゝしめの手に取瀧や飛蛍

葉雫も光るや闇に飛はたる

瀧涼し柴の胡座の蛍待

水玉の黄に飛瀧の蛍哉

蛍見のしのひ詣や瀧の宮

^{筑後久留米} 茅呂

杜夕

^{豊後日田} 倫婦

^{全株築} 江芦

古桂

^{肥後熊本} 素朝

乙明

満志

^{長崎} 路圭

^{筑前博多} 鳧牧

杏雨

兆虎

計圭

^{福岡} 尺芦

者乙

誘甫

兎株

^{全杞木} 池水

^{全吉木} 舎乙

鈴虫や暁舟のさくり岸

船客のつかミ料理や浦の秋

涼しさや浦を七重のかゝり船

市相場舟に聞日や祭客

神鴉

神からすのし羽さし羽や雲の峯

神鴉ふたつひと羽や山さくら

神鴉かさす若葉や雨やとり

夕立や物の香散て神からす

御鴉やけふ月雪も霞かな

明燈

一夜願御燈も叶へほとゝきす

神の灯や夜明涼しき蟬の穴

御燈に春や残りの明離れ

明燈や波に散浮毒紅葉

御灯に明くる若葉やいつくしま

明燈に風のかほりや泊り舟

数の燈や水鷄も馴て巖嶋

明燈の闇にまいるや飛千鳥

芦鴻

扇之

其勇

冬扇

素淺

扇之

晚汀

宜應

沙鷗

筑前博多
未雷

同福岡
杏雨

万李

筑前赤間
都外

計圭

素元

澤翠

井楓

灯火に巻れて涼し藻塩草

燈に鱸のあをちや春の魚

燈もみな梅か香やいつくしま

燈もさゆる霜夜や巖しま

千燈や三年ハ安し夏祓

眉涼し御燈し深き汐の底

しくるゝや御燈にすかるをくれ舟

春寒し数の御燈の汐移り

山吹や御燈崩さぬ波の上

暑をちらす燈明し水の上

漁火明て御燈に常の波涼し

明燈や汐につらくけしの花

御灯や蚊の聲渡る鈴の音

明燈のうつりや霜の濱涼ミ

御燈も明る一所や湛へ潮

山黒む御燈の夏や夜の明

明燈や光りの中のおほろ月

夜を残す霞も高し御燈籠

龍燈や花の九重いつくしま

明燈や昼ハ臈の白椿

明燈や神の涼ミの朗嶋

同杞木
浦之

同芦屋
素蝶

同直方
可文

全庫崎
為敲

筑後舊尊寺
木而

善尊寺
雪刀

而后

全片額
為雅

市山

筑後久留米
秋虎

全
魯用

豊後日田
野紅

全
倫婦

全玖珠
古桂

長谷赤間関
蓬雨

翠門

石見濱田
梨明

肥後熊本
乙明

備中玉置
満志

文州

全鴨方
可環

明燈や汐待暑き片廊下

明灯や傘のはつれに冬の星

夏の虫來ぬ明燈や海七里

大元

大もとや櫻に黒む人の顔

大もとの花のふとりや西東

寐鳥散る宮の夜明や初櫻

滝宮

水の上絵に流れ行蜚かな

なかる、やそれも蜚の羽の休ミ

鏡池

汐けふり静る月や池のつや

町は寐て月のあゆミや鏡池

月に研く鏡や池の亭主ふり

鼻息も池のこたまや月ひとり

谷原

つれ鹿の背た、くや森の雨

晩汀

歌隣

雨聞
┌

青々

冬扇

素淺
┌

雨聞

青々
┌

芦鴻

沙鷗

菟山

青々
┌

沙鷗

明かたや哀つくねし鹿のむれ

入違ひ立や尾上の女夫鹿

さおしかの角にかさるや草の花

聲寒し鹿も木の葉の寐つくろひ

漁火の明り傳ふや鹿の聲

餌に肥て鹿の楽寐や草の原

御笠濱

浦の雪わかれ跡せず舟と舩

鴉の羽を延す石なし浦の雪

初雪や衿宜の寐顔の浦詠め

満潮や雪の旦の目の余り

年歩む雪の瀬こしや御笠濱

雪鋪や宵の雑喉寐の濱わかれ

引汐や雪の追行砂のうへ

有浦

脆夜や欠屈きし舟と舩

舟と陸帷子赤し客迎ひ

有浦の舟の礼日や茶の花香

ありの浦しくれの舟や聲屈き

青々

冬扇

雨聞

泉風

夜琴
┌

素淺

達士

芦鴻

冬扇

市嵐

規道

福山
宜應

沙鷗
┌

市嵐

雨聞

達士

泉風

れい／＼と蛩に明し宮掛り

風歩

一くるにみかさの外も浦の雪

風歩

夕なきや汐もたゝえて濱の雪

李徑

鏡池

嶋かけの實る桂や秋の池

倚松

有浦

夕舟

月影や一葉もちらす鏡池

以水

舟着る鷄頭原や客座敷

藍水

月は池に此手かしハの二柱

風歩

蚊帳つらぬねところ廣し泊り舟

芦笛

月ハ爰に秋の眼やかゝみ池

尾道
規道

入舟や山ほとゝきす丸裸

倚姿

三日月の後向せむかゝみ池

夕舟

有浦の添る冬木や柱舟

丈羽

谷原

朝鹿の角一むらや宮木立

藍水

神鴉

霞友

撫られて寐に行鹿や市の暮

以水

御鴉や波に飛てふたつ星

以水

足弱にあてかひ有や鹿の聲

夕舟

鈴音の拍子に飛や宮鳥

夕舟

袖寒き尾上落しや鹿の聲

竹呂

物毎にさとし若葉の神鴉

風歩

谷か原木ゝに曲るや鹿の聲

倚松

御からすや南へ飛鐘の聲

友之

稲妻や鹿の面のすやつかハラ

流巴

浦つたひ月も木深し神鴉

市嵐

御笠濱

足とまる濱の御笠や雪の姿

丈羽

照添る夜ハ御燈の幾紅葉

備後福山
素淺

姿も帆も一筋道や雪の濱

倚松

明燈に飛や御調のさくら鯛

達士

はま雪や杖の輕ミの老の腰

友之

涼ミ人の顔もあらハに御燈哉

市嵐

谷原

老鹿の寐着ぬ聲や谷原

谷か原鹿の寐のひや草薙

うら枯て鹿の尾淋し谷か原

谷陰や頭を伸す鹿の物わすれ

御笠濱

顔黒む御笠の雪や内侍達

忌竹に雪おれハなし御笠濱

雪の日や白張はらふ御笠濱

有浦

入舟や秋の色つむ有の浦

帆はしらハ蟬の逃場や有の浦

新米を運ふ櫓やありのうら

入船をかさす扇やありのうら

常ハ秋秣ハ香もあり有の浦

神鴉

色からぬ奈の世帯や神からす

御鴉の口や涼しき精進箸

露國

木端

切偲

汶上

葛丈

木端

素梅

汶上

切偲

羽足

木端

素泉

羽足

葛丈

誓ひ有梢ハ涼し神鴉

峯こしを青葉に聞や神鴉

明燈

光勝つなミの御燈や朧月

陰陽月や御燈の海の昼

明燈や泥足直す蜆とり

明燈や冬木ハことに浪の数

明灯やみなかしこまる涼ミ舟

明燈や蔓の花野の草かつら

大元

浮雲に地に立雲や宮さくら

舞臺子の只かほふるし櫻狩

櫻より七浦に散る小鳥哉

大もとの斧のたるミや花盛

大もとに野乞食肥る櫻哉

滝宮

瀧の宮蛭三十日や薄化粧

日ハ八つの蛭時なり瀧のもと

千之
梅栖

備後三原
夕舟

霞友

芦笛

倚松

尾道
梢風

三原
丈羽

流巴

藍水

以水

竹呂

不至

霞友

倚松

國つれの舟の賦りや夕涼ミ

買喰に舟の足場や涼客

船くや人はかくれて朧聲

類船をまねく岸根の柳かな

浦陰や泊りの舟も夏座敷

神鴉

御鴉に朝せる舟の霞かな

御鴉の其尾に付やしくれ雲

若竹や足こゝろミる神からす

木々に覚て山ねふらさぬ神鴉哉

笛の音にかすみ碎し烏かな

峯に雲それから烏青あらし

奉納一句を吟し八景の軸二加へ侍る

はへぬけるみとりや波のいつくしま

明燈

魚の浪よする御灯の影涼し

涼風や浪の御燈の二里明り

御燈や山も立テよし五月闇

明燈の影やこほれて鳴千鳥

吟素

文枝

柴梅

艸巴

風律

陽水

風律

呂舟

青雨

雪航

梅北

江山

藝州廿日市

切偲

素梅

木端

小方
柯中

明燈や紅葉に照りて浪のうね

大元

大もとや氣俣を遊ぶさくら魚

釣舟もさくらの陰や汐たるみ

日うつりに猿の只手や初櫻

濱風や櫻を傳ふ大鳥居

大元やさくら見すかすなきの海

大元のさくらに匂へ玉簪

大もとや猿も櫻にそハへ足

大元や明る櫻の鈴の音

瀧宮

手拭に螢も染や滝の宮

鏡池

絵か、はや松から月のか、み池

曇なし野分の跡の月と池

左手に月は置なりか、み池

月直に池や鏡の相照らし

可部
路友

汶上

犁子

切偲

小方
素染

梅栖

藝州大滝
巨磔

可部
路友

其詠

汶上

鏡池

素梅

素染

柯中

巨磔

瀧宮

滝波にしかミ付たるほたるかな
神垣の瀧のあるしやちる蜋
瀧筋や蜋につれてすへり道
旅の汗拭はて瀧の蜋かな
若杵宜の蜋あひそや瀧のもと

風律
東雄
呂舟
梢風
不一

鏡池

池の汐月のねふりや留り魚
かいもとり覗くや池の初月夜
漣や奈から落て池の月
葉をぬけて白きや月の池の隈
名月や冬まで氷れ池の底
池の月照るや草葉の裏表
月澄や池に聞出すうねり鐘

仙呂
梅北
青雨
東雄
風律
冬羽
壺天

谷原

さほ鹿やほとひてはしるすき原
原かけて鹿や朝日にうしろ向ク
立鹿の模様かハるや萩薄
市時ハ鹿も假寐や谷か原

青雨
壺天
風律
東雄

角勝手居直る鹿や谷か原

鹿鳴や咽まで延ひし艸の丈
谷風や鹿の音を聞風呂戻り
谷風に身をすほめけり鹿の声

牡支

御笠濱

立波の高さに置や濱の雪
礮の香を降うつミたる深雪哉
汐先に鳥のされや濱のゆき
赤奈のちよつくと雪の御濱かな
和浪の海手柄や雪に御笠濱
舟の塵まひしつまるや浦の雪

壺天

青雨

松明

呂舟

冬羽

瀬戸田
藤丸

有浦

竪に横に舟の涼ミや日本の圖
浦舟や聲く暑き聞寐入
松せりのやむや二手に月涼し
蟬の音も添ふてや浦の帆かけ舟
歩行で追涼ミの舟や浦の客
市過る舟の遊女や惣浴衣
船見せや扇の窓も有のうら

梅北

東雄

壺天

青雨

宜由

六梅

仙呂

あさ霞一木つたひや神からす
柏掌の霧をぬけてや呼鳥
木の實つむ鶯も二ツや神鴉
白萩や菜鴉の跡ゆすり
春雨や二つ鴉の枝譲り
風うける屠種との明りや宮鴉

明燈

明燈のゆるかぬ嶋や寒日和
御灯や春をまくはる潮の尺
御燈や只降はかり五月闇
御燈の絶すとうたり雨露の秋
明燈や波のおほろの袖明り
明燈や春の小浪の琴の糸
御灯に涼しめす、しさ月海
初汐や神燈見に行嶋の人
明燈やあさり片寄る春の波
明燈や朧こほる、波の上
明燈に浦の寐覺や花さかり
明燈や望月くらし霧の海
明燈や峯の若葉の風の筋

文朝
路芦
麻直
李中
瓜歩
諷沙

蘇州廣島
東雄

壺天
風律
仙呂
梅北
梅丈
芦江
青雨
亭々
文五
文枝
吟素
蛙町

明燈や霞かくれに神子の袖
目印の霞御燈や浪の照
明燈や雪の花ちる相明り
御燈や祭化粧の内侍達
友鹿の宵寐くつゝる御燈かな

大元

波に散るさくらの昼や祓串
明鑿の音照る朝や宮さくら
大もとや海へ影さす初さくら
おほもとや拝むも見るも初櫻
さくら咲濱に幅有祢宜中間
只の手をたゝくや祢宜の櫻越し
山や濱さくらにたとるくつれ足
汐に浮魚もさくらも神の塵
幣手振る磯の薫りのさくら哉
櫻見や素湯の味よき神子の宿
宮守も杣も手振のさくらかな
宮くるめ櫻に照や濱明り
跡追ひの花見の連か片帆船

牡支
柴梅
五艸
葎主
藤丸
瀬戸田

壺天
葎主
仙呂
風律
吟素
梅北
六梅
青雨
梅丈
蛙町
宜由
呂舟
藤丸
瀬戸田

御笠濱鋪雪

明の炬や雪の御笠の遠光り

雪の濱暮なを照し鳥の声

見る人も雪の内なり御笠濱

御笠濱海士かつくはふ雪もなし

満汐のへたてや雪の八重畳

積雪や風に角なき御笠濱

鷺足や水主の雪漕く御笠濱

幣に散る御笠の雪や風なくれ

積雪の外に色なし御笠濱

雪降ハ縮む羽をのす磯雀

玉垣ハ雪の仕切か御笠濱

持合ふや御笠の雪の右ひたり

つむ雪や浪のきは取御笠濱

雪の日は風の木葉の千鳥哉

有浦客船

入舟や頭巾なからのかけ咄し

顔出して苦に涼むや有の浦

七種や有の浦行舟拍子

舟を野に摘や若菜の有の浦

二助

似夕

以全

伴古

路芦

胡洞

諷沙

瓜歩

李中

如之

李窓

成政

礎月

文朝

似夕

胡洞

李中

路芦

酒買て寐に行舟も小春哉

船に焼散るも木葉や有の浦

帆印ハ下女か見るめや有の浦

有のうら舟の荷くりも小春哉

初綿に舟子いさむや有の浦

荒拍子舟の齊や有の浦

有のうら苦に亥の子の餅の音

二位の洲の昔や問て鳴千鳥

浦涼し我一勝の舟しるし

苦舟の間くく、る千鳥哉

六月や國舟まどふ市女笠

節季候や船く覗く有の浦

彌山神鴉

卯長雨や番ひ鴉の峯移り

神鴉餌はミハ清し櫻の實

夏垢離に限取峯や朝からす

松つ、し分る鴉や二はしら

五鴉や雛の羽つよる岩つ、し

神の井や車長閑に明ヶからす

巢をぬけて遊ぶや神の祖鴉

以全

麻直

諷沙

如之

文朝

礎月

二助

伴古

成政

李窓

瓜歩

墨之

胡洞

以全

二助

似夕

礎月

如之

成政

滝壺に流れてハ飛蜩かな
瀧煙つゝむ鳥居のほたるかな
滝の宮我ものにして飛蜩
たきの宮かハく葉もなし飛蜩
杉しける瀧の蜩や宮の朱
瀧の玉争ふかずやとふほたる
たきうけて宮ゐに灯す蜩かな
白糸を結くる瀧の蜩哉
瑞籬に蜩散込滝の音

鏡池秋月

手清めの雫もいとへ池の月
水さひるし塵も錦や秋の月
月添ふや葉ハ色ミの水鏡
姿の葉の峠の月やかゝみ池
池の名の素只を照るや月の松
月澄や浪あたらしき池の秋
池の草月や鏡の面くもり
夕露や水かねこほす池の月
三日月の跡てる星や鏡池
月澄や池は鏡の筒のかたち

李中

礎月

麻直

如之

二助

李窓

墨之

似夕

路芦

礎月

墨之

胡洞

如之

二助

路芦

似夕

以全

文朝

李中

雲すきや池ハ鏡の白月夜
能うつる月のあゆミや池の形リ
池水の月や鏡の拭たて

谷原麋鹿

初夜後夜の哀さ分よ谷の鹿
さをしかの蹴こほす露や草隠レ
谷か原己か音迷ふ鹿の耳
姿陰や谷に風きる鹿の角
道芝の人跡行や谷の鹿
鹿の尾に秋も暮けり谷か原
朝露や鹿の毛に振る谷曇リ
片峯の雨をぬけてや鹿の聲
谷河に鹿や角研さゝ濁り
鹿鳴や夕日をさゆる谷か原
谷風や朝たつ鹿の合せ聲
萩薄しなへに飛やたにの鹿
跡を引筈や鹿の谷かハラ
鹿の背にかする日脚や谷の水

諷沙

瓜歩

麻直

李中

似夕

成政

胡洞

路芦

二助

以全

瓜歩

礎月

諷沙

麻直

文朝

墨之

如之

嚴島明燈

百八の光りや波のさくら鯛

回廊に潮満る夜や花紅葉

百八の御燈尊しきりの海

明燈や梅に虹引なミの間

明燈やそゞろに涼し星月夜

明燈に潮風涼し宮廻り

花の浪常さす宮の御燈かな

明燈や繪馬も涼しき金砂子

明燈や舟の道付春の雨

裾をたくる回廊涼し浪の燈

明燈や狂はぬ風の薫る音

明燈や塵もすみ引夏の海

明燈や暮る日はなし夏の海

明燈や波に数咲夏つゝし

明燈や浪の木の葉の一照らし

大元櫻花

大元や櫻ありつく小貝取

注連縄や雪ハさくらの初詣

手にかゝむ古木櫻や神の森

嚴島連中
以全

胡洞

諷沙

伴古

礧月

成政

似夕

墨之

二助

路芦

瓜歩

如之

文朝

李窓

李中

諷砂

礧月

成政

大元やうつほをぬけて櫻猿

世々の香を衾にこたへん初さくら

大元やさくらか市の並へ餅

大もとや一木／＼のさくら狩

おほもとや櫻と宿の芽花狩

色別る遠眼の幣や初さくら

大もとや柳の蝶の花うつり

大元やさくらにそゞく酒初穂

裸身は鳥居やそれて櫻道

おほもとや神のかこひの櫻つば

大もとや花にまはゆき鬼瓦

大元や磯馴さくらの預ヶ笠

おほもとや片帆すれ行磯さくら

瀧宮水蛭

木々の葉や滝の水玉かとふ蛭

瀧音や蛭みちひく古社

片そきや滝の水玉かとふ蛭

手にうくる瀧の蛭やさゝれ砂

瀧の宮昼蛭見む木下闇

はたる見やつ／＼光る瀧の音

二助

胡洞

路芦

瓜歩

李窓

李中

文朝

麻直

以全

似夕

如之

墨之

伴古

瓜歩

文朝

成政

諷砂

以全

胡洞

伊都岐寫八景下

八景集俳諧發句序

八景集ハいともかしこき大宮人の御さたとし靈寫の勝景をえらひ詩歌をさため 神慮をなくさめ給へハ神徳もいやまし山さかへ谷茂り落葉を拾へる人々も同じく和哥を奉り詩を奉納し侍る連歌ハ花のもとを初に立て其道筋をたとれるかすくの言種なり前光明院大徳恕信机上にあつめ俳諧一卷ハ下官にえらふべきよいなミかたく恐れミおそれミ神慮に備へ侍るもとより此處ハ予にちなみあつき連衆なれハともに筆をならへ西海の風人に告るに此御めくみに逢侍らん事をよるこひ各急帆に寸情をうつたふるのミ東北の遠津國へハ使すへき間もなく相知人まれくなれハもらし侍るそ本意なし抑詩哥連俳の名目は前後ありといへとも物に感じ一情轉する事ハ和漢昔今合一なれハいつれを前としいつれを後とさため侍るへき製作ハ其家の流とかや美言俚語も眞實をもて 神ハ感通し給ふへし豈巧言令色の類ならむや猶此嶋行脚の先達の句をならへ此一帖の抜とさため詩哥連俳の四種三冊一部となり 嚴嶋八景の表題四字ハ風早三位卿の御染毫とかやうけ給り侍るなり

元文四年仲秋

淺生庵野坡敬述

嚴嶋八景集俳諧發句

嚴嶋明燈

明燈や殊に年立はしめの夜

淺生

大元櫻花

此貴賤不淨ふれすや山さくら

滝宮水蛭

水に種神や蒔らむ散ほたる

天衣裏にも匂へはつほたる

豊後
馬貞

鏡池秋月

名月も老にけらしなかゝみ池

淺生

谷原麋鹿

艸からむ渡海も安き鹿の道

馬貞

御笠濱鋪雪

一寸の雪の果なし御笠濱

淺生

有浦客船

産声の地舟のとけし有のうら

淺生

彌山神鴉

秋の葉や施主讀經の峯鴉

馬貞

秋の水空もひとつにくもりなき月そ鏡の池にうつろふ

谷原麋鹿

恕信

神代よりつかひはなれすすみの山すみて幸ある鳥あやしき

恕信

小男鹿のたちとやいつこやつかハラ萩に聲ある花の夕風

直條

先年王卿雲客嚴寫八景の詩歌奉納ありし已來諸方遠近となく禪師なる俗なるからのやまとの言の葉をもて 大明神の玠の廣前に奉る事数

谷か原小萩色つく秋風にさひしさそふる小男鹿の聲

恕信

く多し今他の望にまかせて上の巻につゐてこれをも梓にちりハめ侍るいつれも奉納の志もたしかたしといへともことく入集せんもあり数多くて心やましされハとて私に取捨し侍らんハおよひなき事に

御笠濱鋪雪

直條

しあれハこれを 神慮にまかせ奉りていさ、か私のはからひなくこ、

分て今朝しろきをミレハ降積るみかさの濱の雪の真砂地

恕信

に入集し侍る此内予愚詠をはしめはえなき言葉腰つくらぬたくひも有

よもすからよせてかへらぬ波かともけさそ御笠の濱の白雪

有浦客船

りをいひのへ侍るものならし

浪の上にゆくも帰るもこきよする心やありの浦の船人

直條

かすく名残もありの浦なれやよせける舟の出かてにする

恕信

弥山神鴉

嶋山の神のむかしのこと、はんすむもあやしきふたつ鴉に

直條

かけまくもかしこき 市杵島姫命の鎮座なしたまふ安藝國宮嶋ハ天下
勝境海内の名區なり御神徳の威靈に御仁慈の深くおハします事ハ今更
いはんも恐し其美景さへ愚なる口にかたり拙き筆にものせんハ中／＼
浅くや侍らんされハいにしへより大宮人のからのやまとの言の葉数
／＼ありぬへしといへともいかなるゆへにや今にいひ傳へさるこそ念
なき事のかきりにハ侍れ予年来景詠の詩哥を簪紳家に勧進して奉納せ
ん事をねかひ侍りしに石清水の社職柏亭直條ハはやく心しらひの友と
ちにて侍る予か念願の趣を聞てしきりに勸め誘はれけれハ此人と相と
もに夙早宰相公長卿の許に参りひたすら願ひ侍りし相公にも 神慮の
たうとき事をやおほしめしけんやことなき御方にて御沙汰にもおよひ
侍りしとかややかて冷泉黄門為綱卿に申させ給ひしかハ求に應して新
に八景の題を組て給ハリぬ相公題を諸家へわかちくはりたまひしに正
徳五年仲夏の比詠歌も出来各染筆も相調しかハ同年六月中三日恭しく
大明神の珍の廣前に捧奉りぬ其折しも社祠神官供僧内侍赤上中下まい
りつとひて裴束の袂をはへ大祓神楽舞樂讀經などの祭事とり行へるを
こそかなりし儀粧ともいとたふとくそおほへ侍る扱もやつかれかい
さ、かなる心の根さしよりおこりてか、るおほけなき事をねかひ侍り
しに實さへ花さへかくまで事なりぬるもひとへに神慮の感通むなしか
らさるゆへならむとおそろしくも有たくも思ひ侍れハ八の題ことに
愚なる心さしをかたくななる言の葉につゝりてこれを 大明神の御宝
前に捧奉らんハ猶おそれのなくもやハある只廣き御めくミに罪ゆるし

給はん事をねかひ侍るのミ

直條納奉る和哥
をもこゝに傳付侍る

嚴寫明燈

燈のあまたの影も所からひかりことなるいつくしま姫

柏亭直條

いつくしまむかふ心もはるゝ夜の星とミやゐの数の灯

沙門恕信

大元櫻花

直條

春いく代かけてあふかむ大もとの神の御前の花の白ゆふ

恕信

色ことにほふものから大元のいかきの花ハ折もやつさす

滝宮水蛭

直條

神垣のあたりに落る瀧波によるハ蛭の影もみたれて

恕信

白糸の滝の宮居の手向ともをのれもえてや蛭飛らん

鏡池秋月

直條

やハらくるひかりやみかく秋の月うつる鏡の池の心も

岡谷に星てりとをる鹿子哉

松之坊
守言

妻こめになひくや谷の鹿鳴艸

児玉春仍

御笠演鋪雪

雪その御笠の濱の朝きよめ

熊野安吉

ふまてみよ爰ハ御笠の濱の雪

飯田富梢

ふりさけてみかさの濱や松の雪

華藏院
良詮

來て見るや御笠のはまの今朝の雪

二階理峰

千代ふるや神のミかさはまの雪

西原政珍

有浦客船

舟とめむしるへも有の浦千鳥

南波通春

船よふに波の聲ありうらの秋

熊野廣包

舟にきく膈もなこりや有の浦

西方院
宥成

百ふねや霞のそこにありの浦

松井吉最

弥山神鴉

しらゆふや花もてまねく山鳥

祝師久品

霧はふく音や神風山からす

田栄伸

山からす聲を手にとる柳かな

大願寺
海雅

しける陰によるや神ます山鳥

沙門恕信

安藝州嚴島八の勝景ハ巻首に老父宗春くハしくしるせる所なり高貴を
はしめ詩哥連歌の發句とも多く集れる中に發句ハやつかれに書付よと

沙門恕信の懇望なれハ禿毫の跡を恥おもへとも此事の時にあへるを悦
ひかつハ 神明の冥慮にもかなひぬるにやとたうとさのあまり句とも
を書つらねて奥書を残すものならし

右嚴嶋連中奉納

摂津國難波

西山氏蟠庵

昌察

嚴島明燈

灯もあらたに涼し宮所

小嶋常也

大元櫻花

名にしおふもとたつ花や二柱

般舟寺
喚助

滝宮水蛭

瀧の糸や玉ぬきとめす飛蛭

沼田招清

鏡池秋月

池水に月もますミの鏡かな

富島福救

谷原麋鹿

鹿は秋の哀もふかし谷の聲

兼弘重矩

御笠演鋪雪

白雪ハ御笠の濱の真砂かな

沼田正敏

有浦客船

行春のとまりやいつこ有の浦

沼田正方

弥山神鴉

鳥鳴山路の霜を宮ぬ哉

富島好元

右廣嶋連中

弥山神鴉 宮居あれハからす亦よし春の山 法橋昌純

藝州嚴嶋ハ西の國の嶋く磯のうへにもたくひあらす世に聞えし勝地
なり御社のさまいへハさらなり玉垣廻廊蒼海にのそみてしりへハ山高
く松杉とこしなへに生ならひて木深き陰かうくし当初 神明の此所
に御心をと、めたまひて宮ハしめたまひけんとおもひやるさへいとも
かしこし往來の旅船も此渚をたゝにハ過しとそ覚え侍る風景相留るに
似たりと唐土の歌にも作れる心はへなるへし爰に光明院恕信かゝる境
地にいまた八景の名なきを歎てつゐに所々の名を書あつめ是を京師に」
つたへねかへるにより時の卿相其景地の品を定られ和哥を詠したまハ
りて本意のこと事なりぬ誠に淺からぬ志ならんかしさるにより連歌の
發句をもこれかれに勧めんため予に八景のおもむきを書記すへきよし
たひく懇望なれハいなミかたくて老筆を染侍るものなり

浪速西山氏 嘯林齊宗春

嚴島明燈

灯に見ぬ春風や神こゝろ 大聖院 僧正守詮

ともしひによるこそまされ嶋の春 柳守 野坂元義

ともし火に薄霧かほる宮あ哉 上卿 三宅守行

夜なかかれ猶ともし火を宮所 野坂林方

大元櫻花

大もとや花の時うる市の場

色ハさそ其大もとのさくら花

植つくや大もとと見る櫻花

佐保姫の神に手向る櫻かな

神垣ハ其世の花の根さしかな

滝宮水蛭

燈やはたるも奉る瀧の宮

水涼し蛭の登る瀧の宮

瀧浪のうたぬ蛭ハ庭火かな

糸すちに乱る、瀧の蛭かな

うつな人神ます滝に飛蛭

鏡池秋月

池の名をあらハす月の鏡かな

あひにあふ池水の月やとも鏡

俤をミ池八月のか、み哉

ともにみよ月も鏡の池の面

てりそふ八月と鏡の御池かな

谷原麋鹿

鳴鹿のたち所もしるしやつか原

棹鹿に耳たつるなり谷かハラ

田親繼

福田元廣

松之坊 良言

山崎生起

荒谷勝重

田幸栄

上卿紀親

一乗坊 成遍

野坂以全

平野宗恩

三浦林昌

祝師就親

東泉坊 傳正

瀬良充常

二階常方

田重信

村井守高

藝州廣島 田中忠

梅園正珉

千一奴、山兮萬頃滄
弥峰竒絶、甲扶桑
過舟、笛裏泛、桑器
怪見、神鴉降、嶮岡

京師 伊藤長胤

一拳螺髻渺茫中
老樹周遭、天女宮
又有、神鴉能報吉
舟行、長ト去來風

僧瞻雲

妙高嶺、聳海中天
神烏雙棲、知幾年
華鶴、有時鳴、賽鼓
排雲、脚供去、翻々

田邊方業

絶頂棲鴉、不作群
尋常豈到、碧灣濱
樓船遙設、賽恩奠
飛下、脚供凌、紫氛

弥嶺、自岌、靈鴉栖、密條
衝嵐、雙袖冷、邊嶋、小舟遥
聞笛、山頭下、含、桑波、上、飄
神、仙、元、所、芰、去、欲、問、松、喬

千早振神代より跡をたれまして御あらかすか／＼しき安藝の嚴島八日
本の勝境にて洞庭の佳景にもおさ／＼おとるまじきとなん彼嶋の光明
院恕信といへる大徳年比大宮人を勧め奉り八の景色の題を申こひて詠
歌も共に成就していつれも御筆を染られて納め奉らしめ給ふさるによ
り我ともからも上の句をと勸進により行て見ぬさかひの事ながら各つ
らね侍りて 神の廣前に捧奉る事左のことし

法橋昌純

嚴島明燈	波涼しともすも神のひかりかな	法眼昌億
大元櫻花	人の種もつきぬ神代の櫻かな	法橋昌榮
滝宮水蛭	玉そとハ瀧の宮見ん飛はたる	柏亭直條
鏡池秋月	月ハその神の鏡と御池かな	杜多周旋
谷原麋鹿	思ひいと鹿の音たつる太谷哉	沙門玄程
御笠演鋪雪	いさきよしひかりみかさの濱の雪	柏村真直
有浦客船	舟道ハありてふうらや霧の海	里村昌頤

奥ふかきミ山かくれに鳴からす馴てや神の心をもしる

森脇江月

神代よりつかひのからす此山のなれし梢ハえらハてや住

道工彦文

つかひ住ミやまからすの聞なれて世々にをりくる笛竹の聲

僧惠應

世々をへてふりし宮ぬに鳴音さへかミさひにけり太山からすハ

雲州松江
熊谷時孝
同
乙部可寛

つかひのミすミの山てふやまからす神の恵になれて鳴なり

佐伯林久

弥高き峯をやとりと神垣になる、鳥のいくよへぬらん

富寫喜補

此山の神の心になれて住ふたつからすの聲もむつまし

勢州山田
僧玄心

雲帰る峯の鳥ぬに打はふきふたつ鳥のゆふかけて鳴

西原政珎

いやたかき此山からす今も猶神のめくミをみするあやしさ

僧月泉

山からす今そ聲きく沖波にとくいうかへて神まつるらし

見るからにいと、かしこき此山の神につかふるふたつからすハ

原田益積

笛竹の聲をしるへに嶋めくるをふねにかよふ鳥あやしき

廣島
名井相休

嶋輪なる宮ぬにかよふ山からす馴る、ハあやし笛竹の聲

巖嶋社祠官上卿
佐伯親盈

いや高き神の恵ミを此山に馴てからすの幾世見すらん

同社大宮欄守
佐伯元教

僧獨麟

山一靈 高占 碧一崔一嵬

千一歳 祐民 最異 哉

設供 舟一中 吹玉一笛

一雙 玄一羽 出雲一來

黄檗壽泉院
僧日峰

崢一嶠 靈一嶽 瑞一煙 霏

遙一見 黒一衣 下翠一微

蘋一藻 巧一啣 斜一日 外

翩一々 時一掠 客一船 歸

僧瞻雲

古岸候風、賈客舟、
吳歌一曲、度鷗洲、
不知遙夜、蓬牕夢、
魂與月明、到幾州、

黃壁天真院
僧仁峰

有浦風光、何所、有、
晚來唯見、旅人、船、
定知吟得、張公、句、
猶聽鐘聲、半夜、天、

肥前長崎
村岡重徳

幾多帆影、落江、潯、
山麗水、鮮、繫、客、心、
一夜悠揚、蓬、寫、夢、
夢魂直與、月、浮、沉、

田邊方業

千竿、檣、影、側、沙、頭、
蓬底、相逢、共、話、愁、
南北、東西、萍、水、客、
歸心、一片、逐、江、流、

藝州廣島
太田正章

緑楊、春水、白鷗、汀、
此地、客舟、幾度、經、
應是、夜來、蓬底、雨、
故園、草入、夢中、青、

梶野宣堅

江上、烟霞、知幾、船、
東音、西話、暗相、連、
躊躇、不、爲、風、浪、
因憶、高房、留別、篇、

彌山神鴉

梅月堂
宣阿

嶋めくる小船に神も心ひくミ山からすや波におり来る

岡本貞喬

神社建しハ遠きむかしよりふかき恵にからすなつそふ

大寫正信

幾とせか宮居になる、此山の林のからす名こそふりせぬ

僧都珠峰

松に咲花もミやゐの山からすつかひのつはさ千世をかさねて

城州八幡 橋本重徳

わけて猶海のさちやハ有の浦の浪間につとふ出船入舟

吉井豊庸

真帆ひきて出行舟も今しハし名残や有の浦の追風

高橋氏 伊和女

見るか内に出るも有の浦浪のよりくる舟の数もしられぬ

僧惠應

宮嶋によせて久しき泊り舟あかぬ名残や有の浦浪

嚴嶋 佐伯喜垂

より來るハいく国舟そしなくの世渡るわさや有の浦半に

廣島 木村方武

朝な夕な聲を帆にあげて寄くれは出るも有の浦の友舟

村上政休

より來るもかへるも有の浦なミや見るめにきほふ舟の聲々

佐伯林久

遠近に真帆ひきつれて行舟もこゝに心やありのうら浪

富島邦好

此神のちかひも有の浦なミに心よせ來る船そかすそふ

西原政珍

漕わかれ出れハやかてよる船も有の浦半の朝な夕なに

英子

此嶋の見るめに愛し舟ことにとまりていくかの浦波

廣島 周防氏 俊女

身のわさのたつき有とや有の浦にをのかさまくよする友舟

同 辻村孝義

たえす猶神のめくミハ浦の名のありとしりてやよする百舟

梅江軒知足

便よき渚や頼む百船も千ふねもこゝに有の浦波

梅園正珉

片帆西又東晚入碧灣中

幽渚一痕月寒潮萬里風

越商通財貨楚客任萍蓬

孤嶼豐饒地四時樂不窮

僧獨麟

群帆落日向仙山

繫纜翠巖碧石灣

借問東西南北客

夢魂應不到人間

田邊方葉

有浦客船

梅月堂 宣阿

過かてに沖こく舟のよりくるハ神にねかひや有の浦浪

嚴厲社士 里村久豊

世を渡る心くいのいとなミヤ千舟もこゝにありのうら浪

田幸栄

ひろひとるみるめも有の浦風をまつかけちかくつなく友舟

京師 桑門似雲

今日いくかつなてもとかす此嶋にあかぬ見るめや有の浦舟

大嶋正信

漕よするたよりもありの浦風にかへる心やなミの舟人

雲州松江 大野真敏

こゝにしも泊り定めてよる舟ハあかぬなかもや有の浦浪

僧釣月

いく世をかふるき湊ハ有の浦にたえすよせくる浪の百舟

完甘光似

いつくしま沖こく船も心とめて見るめや有の浦によすらん

粟屋氏 好子

旅人もあかぬ心や有のうらによせ來てつなく舟を数そふ

秋本亮吟

時わかす行かふ舟もさし寄て神にちかひやありの浦浪

藝州廣島 渡部真知

梅園正珉

奔―濤 捲レ雪、海―風 凜タリ
 想ヒ得 扁 舟 月 夜 深
 埋ニ没チ 千―峰 ヲ 銀、一―抹
 不レ知 何、處ニ 間、山―陰、
 映レ宮ニ 鋪―雪 海―門、西
 色―々 射―眸 望ニ 欲ス 迷、
 鶴―處 影、寒、花―表、外
 不レ妨 碧―浪 捲、銀―泥、
 凍―雲 御―笠、濱 平―地 忽チ 鋪、
 瀾―上 題スル 詩、客 山 陰 乘スル 興ニ 人
 一―簑 千―頃、浪 萬―樹 滿―林、春
 先ッ 見ル 豊―登、瑞 謡―歌ス 處―々、民

神代よりさすか御笠の濱の名も降つもりぬる雪の真砂地

嵯
永田政伸

道工彦文

都路の人にかたらんふりつもる雪をみかさの濱つとにして

塩谷貞敏

磯木とる道やみかさの濱つたひとつもる深雪に跡も見えけり

吉井豊庸

名にふりし夜の雨にもまさらん御笠の濱の雪の曙

肥前長崎
河本正豪

乙女子かかつく御笠の濱きよみふりしく雪の袖の白妙

廣
小川親之

きてミレハいつくハあれと宮嶋やみかさの濱の雪の花その

同
喜多村成儀

つもりつ、雪の浦山つらなれとわきてみかさの濱の白妙

村上政休

汐風によりくる波もひとつ色にさゆるみかさの濱のしら雪

富島邦好

海とをくはれて日影ハさし出る御笠の濱の雪の夕はへ

洛下
祥麟和尚

つもりて八月にまかはんうち散も花にみかさの濱の白雪

一

愛宕山圓學院
大僧都泰和

僧獨麟

僧瞻雲

黃檗竜興院
僧百泉

一

御笠濱鋪雪

あかすとか神もみかさの濱松に明ほのとをくつもる白雪

ふりにける御笠のはまの松か枝に幾千代かけし雪の白ゆふ

降敷てたくひもなミやさすしほのみかさの濱の雪の明ほの

森脇江月

打よする波をもそれと白妙にみかさの濱の雪の朝風

粟屋氏
好子

真砂地にひかりをそへて降つもる雪をみかさの濱の松原

秋本亮吟

かく筆もえこそおよハね船さしてみかさの濱の雪の明灰

洛下
萩田孝延

性、時、頼、濯
間、出、無、々
又、遊、周、山
多、街、主、原
壽、市、逐、鹿
知、相、莫、呦
有、呼、使、々
帶、傍、鄭、日
銅、石、人、夕
牌、崖、埋、佳

ふるほとハ風もはらハて濱の名の御笠につもる雪の白妙

雲州松江
鈴岡恭寛

浦風にちりかひくもる花かとも御笠の濱の雪のあけほの

同
僧釣月

大君の御笠の濱に世々ふりしみゆきのあとハ今も残れる

僧都珠峰

しのふそよ名にふりし江の雪も今こゝにみかさの濱の白妙

嚴島 青木久雄

秋ハまた淺茅か露のやつかはらに妻こひ初て鹿や鳴らん

防州岩國 粟屋氏 好子

吹おろす嵐やをくるやつかはらもみちのそのの棹鹿の聲

同 森脇江月

百草の花にあかすや谷原の秋になれぬる小男鹿の聲

同 足立慶專

浦人もあはれとやきく谷原松吹風のさそふ鹿の音

秋本亮吟

やつかはら尾花か袖につゝミかね鹿もほに出て妻や恋らん

富嶋昭亘

しほれゆく淺茅か原の鹿の音に吹あはすめる岡の松風

僧惠應

やつかはら松の嵐のそれならておしか妻恋聲そたゆまぬ

梅江軒知足

鳴鹿や思ひやつるゝ谷原つれなき妻をまつの木の間に

英子

秋萩を折もやつさし谷か原妻やこもと小鹿鳴なり

辻村為孝

なく鹿の聲きく時そ谷か原つまやつれなき限成らん

僧月泉

幾秋もふしとさためてやつかはらはき咲ころハ鹿の鳴なる

嚴島社祠官上卿 佐伯守行

百草の花ハまたミぬ谷かはらにひとり秋しる小男鹿の聲

黄藥宝藏院 僧恭堂

原一上 産シ 來テ 毛正 鮮

呦一々 呼レ 友ヲ 下ニ 江一 邊

見レ 人ヲ 不 怖レ 心 能シ 狎ル

堪レ 愛スルニ 亦 尋ニ 莎 艸ヲ 眠ル

田邊方業

尋ニ 藥ヲ 啣レ 花ヲ 靈一 地ニ 屯

斑一 毛 濯一 々 是レ 神一 恩

呼テ 群ヲ 只 要ス 遊ニ 仙一 境

逢ニ 着ニ 人一 間ニ 豈ニ 駭一 奔

藝州廣島 寺田高通

雨一 餘 芳一 艸 滿一 原 春

水 緑ニ 沙 明ニ 境 自ニ 眞

麋一 鹿 知テ 無ニ 羅一 網 患

呦一 々 不ニ 敢テ 避ニ 遊 人

梅園正珉

谷原麋鹿

梅月堂 宣阿

古一池 一鑑開 又有月明來
露一氣 團一秋一色 水心照却一灰
簷一牙 祥一鳳 下廊一影 卧一竜 回
遠一客 不堪向應一羞 霜一鬢 催

嚴駕社士 飯田勝行

田邊方業

僧素洲

皎一潔 銀一盤 映一鏡 池
寒一光 相一照 碧一疏一璃
風一雲 莫一使一蛟一竜一
清一意 一一般 此一夜 知

洛北賀茂 岡本保助

完甘光似

廣島 松本安美

咲萩の色にミたれてやつか原妻とふ鹿や聲もたゆまぬ

僧都珠峰

蕪一爵 樓一臺 掛一海一頭
鏡一池 秋一水 白一雲 流
水一雲 無一恙 邀一明 月
不減一廣 寒一宮 裡一遊

靈州松江 關戸俊胤

藝州廣嶋 伊坂正周

大原 尼智法

谷か原むれゐる鹿も秋來ぬとまつにつれなき妻こふる聲

同 尼智聞

廟一外 秋一池 鏡一面 開
海一風 淨一掃 點一埃
夜一深 因一醺 青一霄 月
恰一似 竜一珠 捧一出 來

大鳴氏 龜子

やつかハラ紅葉の陰に鳴鹿も色に出てやつま恋る聲

澄わたる影もかゝミの池の名にみかきそ添る秋のよの月

同 村上政休

曇なき鏡の池の水の面に影澄わたる秋のよの月

同 清隆

山鳥のおのへを出し月影を池の鏡にうつしてそみる

同 熊野當居

名にしおふ鏡の池に影をちて猶明らけき秋のよの月

同 富寫憲寛

所からみかく鏡の池水に心もすめる秋のよの月

同 佐藤正方

やはらくる光やみかく神垣の鏡の池の秋の月影

同 惠見道教

さやかなる影をうつして池水の鏡くらぬ秋のよの月

同 富寫喜補

さやけしな手にとるハかり水の面にむかふ鏡の池の月影

洛下称名院主 祥麟和尚

僧獨麟

一泓寒碧傍靈祠
淨似菱華可鑑眉
最是清秋明月夜
其如漢帝影娥池

僧瞻雲

清秋月滿鏡容池
古殿深沉夜色奇
假使蟾宮藏蹟去
分明照見玉娥姿

黄壁紫雲院 僧香堂

七里鳴風仙境清
十分心鏡線池平
秋天夜々白雲散
贖見觸波碎月明

京師 山本元貞

海水通池鏡面開
秋光一碧絕煙埃
最憐靜夜姮娥月
臨照盈々移影來

梅園正珉

勝一境 瑞一雲 浮一タ 螢一處 幽一々
玉兼一飛一瀑 散一星 任一乍一風 流一
陰一怪 明一還 滅一靈 壇一去 或一留
冥一搜 詩一料 足一囊 裏一不 須一収

鏡池秋月

みやしろにかくるひかりも曇なき鏡の池にすめる月影

梅月堂 宣阿

岡本貞喬

名もしるく曇らて幾世ミかくらん鏡か池の秋の夜の月

藝州廣島 近藤久正

所から月もくもらて浪清き鏡の池に影ミかくらし

嚴島社士 田幸栄

うす霧にくもるひかりを秋風のみかく鏡の池の月影

同 佐伯久光

秋にすむ水ハ鏡の池の名をそのまゝみかく月のくまなき

雲州松江 山中章弘

幾秋かふるきかゝミの池水にうつるや月の影ハくもらす

同 乙部可寛

曇りなき水の鏡の池の名を幾世かみかく月の光りも

肥前長崎 吉川雅珍

いひしらぬ神の心や月こよひ鏡の池にかけてすむらん

完甘光似

いく秋か鏡の池の名にしおひて月もますミの影うつすらん

嚴島 青木久行

秋の月てりそふ影や池の名のますミの鏡かけてこそミれ

道工彦文

秋ハなを影をうつして池の名の鏡に月や澄まさるらん

吉井豊庸

秋ことに月もますミの鏡てふ池の心やなれてとふらん

高橋氏 伊和女

くもりなきかゝミの池の心をも猶みかけとやすめる月影

廣島 辻村喜孝

人心猶みかけとや秋の月かゝみの池に影うつすらん

同 黒川貞政

やはらくる光も月にます鏡かゝる御池を愛すやハある

同 松井和遥

秋風にみかく鏡の池の名やミるめくもらぬ浪の月影

星のかけにまかふひかりや此宮の瀧浪遠くゆける螢ハ

洛北大原 尼淳正

涼しさや名におふ宮の瀧の糸のよるハ螢のてらす光も

可部 吉村昌房

天川落来る星かしら糸の瀧津宮ゐにすたく螢ハ

同 長谷川政貞

宮の名の瀧の白糸をのれさへ玉とみたれて螢飛かふ

西原政珍

宮ちかく落来る瀧の白糸につなかね玉やほたる飛かふ

同廣嶋 原田益積

木陰までちりくる瀧のしら玉と見れハほたるのかよふ神垣

黄檗法林院 僧即中

梅江軒知足

靈一祠 夜 静 氣 如 秋

熠一耀 群一飛 燦一急 流

因一憶 古一人 求一數 斛

光一編 岩一谷 樂一優 遊

僧獨麟

藝州廣島 森島勝延

僧瞻雲

田邊方業

澗一陰 古一廟 倚一葱 籠
自一 是 幽一人 避一暑 宮
晚一 映 水 簾 螢一火 影
輕一 和 濺一沫 逐一微 風
天一女 嶋一中 暮一靄 連
瀧一宮 高一處 掛一飛 泉
分一溪 幽一覓 宵一行 影
想一 見 神一光 照一寂 然
路一 遶 羊一腸 山一更 紅
瀑一泉 嫋一々々 掛一岩 頭
祠一前 夜一静 飛一螢 亂
疑一 是 銀一河 星一彩 流
瀑一泉 繚一乱 翠一巖 傍
古一殿 風一 生 六一月 涼
飛一去 飛一 來 螢一火 影
水一品 簾一外 點一星 光

滝宮水蛭

愛宕山大善院 権大僧都惠通

瀧の糸ハぬきもとゝめす玉垣のたまとみたれて蛭飛かふ

梅月堂 宣阿

瀧津浪よるハ蛭のひかりまで涼しさまさる神のミつかき

壁馬祠官 田幸栄

宮人のかさしの玉を白糸につらぬく瀧の水のほたるか

同 田久道

飛ほたるひかりもそひて玉そちる瀧の宮居の波のよるく

同 熊野行廣

落瀧津たきの宮ゐに夜ひかる玉とあさむく水の蛭を

岡本貞喬

宵く宮ゐをさらて瀧津瀬の玉をも友と蛭乱る、

藝州廣島 寺西常之

瀧津波ちかき宮居の灯をなれもかゝけて蛭飛影

豫州今治 僧都珠峯

涼しさをまねく玉かと宮の名の瀧津岩ねを照す蛭ハ

同 完甘光似

むは玉のよるともみえず白糸の瀧の宮ゐをてらす蛭ハ

藝州松江 僧釣月

宮の名の瀧のしら糸よるくハ蛭みたる、浪の涼しさ

同 乙部可寛

飛ほたる影もなかにせき入て落るや瀧の宮の涼しさ

同 永岡久宜

岩浪の玉とみたる、涼しさや瀧の宮ゐにすたく蛭ハ

豫州松山 仙波盛全

和らくるひかり見せてや瀧の宮の落來る水に蛭飛らん

足立慶專

神垣にまちかく落る瀧の糸をよるさへみよと蛭飛らん

大島氏 亀子

此宮の瀧津岩ねに飛蛭影ハさながら波のしら玉

富寫昭亘

瑞籬にすたく蛭の光さへ涼しさまねく瀧の白玉

僧惠寂

宮の名の瀧の白糸みたれ合てかけも涼しく飛蛭哉

鹽谷貞敏

白玉のそれかあらぬか落瀧津たきの宮ゐにすたく蛭ハ

高橋氏 伊和女

蛭さへ玉とみたれて石はしる瀧の宮ゐをさらて飛かふ

長閑にも霞かほりておほともの宮ゐの濱ハはなに明ゆく

京梅畠
僧月泉

僧獨麟

檜一杉深、擁一大元宮
櫻一樹花開、白間ハル紅
十倍、春一城絲一菅響
鶯一声宛一轉、錦一雲中

黄檗漢松院
僧俗峰

何、年カ移シ植テ漢一家種
凝シ雪ヲ興シ雲ヲ萬一樹竒ナリ
果熟、廟一前吾レ要用ス
黄一鶯他一日莫レ相ヒ窺

京師
北村可昌

社一下白一櫻交テ影ヲ深シ
濃一雲淡一霽共ニ森一々
三一春花一事無ニ多一日
坐一愛一千金一刻陰

田邊方業

藝州廣島
寺尾由順

遠陽
僧瞻雲

廣島
梅園正珉

是レ雪是レ雲千一簇堆
瓊葩璀璨一廟前開
紅一裙醉一殺ス遊一春客
歌一吹花一陰亡一却一回
白一櫻一花發、社一前春
自、以二靚一粧ヲ供ニ古一神
雨一々風一々竒一絶處
料、知ル妙一手畫ケレ難シ眞
遅一日大元古一廟前
櫻一花萬一樹映シ雲ニ鮮
風一流多一少遊一春客
誰、賦ス郢一中白雪一篇
大元千古色春一事不相違
濃一豔然ニ滄浪一芳妍襲ニ翠一微
靄一浮チ黄鳥濕ヒ風起チ白一鷗飛
多一少奉祠客賞一心未一肯一歸

大元櫻花

心ある人や手向に植そへて櫻そしけき大もとの宮

八重一重神の社に咲つゝ千本に花もにほふ春風

春に今咲や色香も大もとの神代の花の種残りけん

たくえても恵ハしるし大元の宮ゐの花のふかき色香に

いかハかり神そうくらん大元の春の手向や花の白ゆふ

いく春と末もしられす大元の神のしめゆふ宮の櫻ハ

千百振神代の春を大もとの櫻の花の陰にみすらん

世々めくむ春の嶋根に咲花の大もつつ香や神の櫻ハ

うちよする春の浦浪白妙に咲やさくらも大元の宮

藝州廣島

大久保忠孝

嚴嶋社士

田忠栄

同

三浦元敏

廣島

大嶋正信

「

沙門惠寂

洛北大原寂光院主

尼智法

雲州佐陀

朝山芳房

防州岩國

足立慶專

見そなはハす神の恵を花もさそうけて幾世の春にほふらん

肥前長崎

高原道羽

よる波の花も隔す大元の櫻に匂ふ神のミつかき

竹原

道工彦文

神垣の櫻につなく綱手縄なかき日あかす愛る船人

同

吉井豊庸

瑞籬の春の手向と咲花の散をも神ハぬさとうくらん

同

高橋氏 伊和女

いつよりかかゝる櫻もおほもとの神の御前に咲匂ふらん

同

塩谷貞敏

みつかきの内外にしけき櫻木の咲つゝ花ぞ盛久き

廣島

小川親之

おらてしもぬさと手向ん神垣に咲色あかぬ花の錦を

清水氏

芳房

宮人のあふさきさるさの袂まで櫻ににほふ花の大元

嚴嶋

杉山俱古

咲花の色香もことに大元のいかきの櫻幾世かも經し

浪花隠士

梅江軒知足

神垣のよそめハひろきあを海の色にまきれぬ花の白ゆふ

肥前州長崎
僧謙光

撰津州
僧獨麟

藝州廣島
小鷹狩元方

遠陽
僧瞻雲

肥前長崎
田邊方業

藝州廣島
梅園正珉

同竹原
唐彦明

竈宮爵起水中央
竊糾縵廻千步廊
一步一燈々幾點
寒潭影映簇星光
鴉定鶴棲飲夕陽
紅燈百八點長廊
夜潮推進萬波色
天女分來無盡光
夜色沈々水府空
飛薨重閣鎖雄風
社頭熾灼一燈火
惣入神人和氣中
婦禽落日寫雲中
仙樂聲飄逐晚風
長廊百八燈華燦
影射魚竜海上紅

長廊盤繞海潮通
雕殿影涵銀浪中
百八明燈輝上下
靈光夜々照竜宮
殿廊海氣蒸燦々百華燈
影落魚竜躍光浮雲霧凝
旅舟宵不惑仙掌露須承
能報人間喜永令神德興
山陽開巨鎮海北貢佳名
靈閣舊相望華燈幾箇明
煌々標繡戸灼々點雕薨
媚水寒光散罩汀瑞彩橫
鮫人非泣玉僊女豈遺瓊
波動燃帆影夜閑照權聲
熬掀孤柱聳鯨走大潮平
不見屨精滅祇任竜領驚
高低分若木遠近辯蓬瀛
翻怪乘槎客直凌牛斗行

跡たれし此宮嶋の神かきに内外へたてすてらす灯

同 大嶋氏 亀子

宮嶋の神のめくみも満塩に見えて影そふ百の燈

靈州松江 乙部可寛

明らけき影を波間に宮嶋の仰けハ高き神の灯

同 有澤式玄

ミつ潮に影しうつれハよる魚の数さへミゆる宮の燈

備後尾道 沙門惠寂

照せ猶神のちかひも見えて此汐路にうつる宮の燈

同 富嶋昭亘

宵く影も千尋の沖かけて浪間にうつる宮の灯

洛北大原 尼志計

灯の影をうつして宮嶋のよせくる波に光数そふ

同 尼智詮

汐ミてる玉をうつしていつく嶋たくひも波の神の燈

防州 秋本亮吟

和らくる光の影もミつ塩の波間にうつる宮の灯

靈州竹原 僧惠應

和田津海のたつの都とみつ汐にかけも数かく宮の燈

同 塩谷貞敏

満汐にうつる社の灯もこや和らける光とそみん

廣嶋 村上政休

やハらくる光をそれと夕塩に影もあまたの宮の燈

同 松井和遥

いつくしま神の光も照そひてよに明らけき宮の灯

可部 木原通俱

神代より光をこゝにミヤ嶋の宮の燈猶も照そふ

嚴嶋 西原政珍

燈の数も波間に照そひて玉もかゝやくいちき嶋姫

靈州廿日市 渡邊氏 英子

いつくしまミち来る塩に神垣の百の燈光数そふ

廣嶋 河村氏 源女

ミつ潮の波のよるく燈の影もしつけき神の宮みに

嚴嶋祠官祝師 佐伯久寛

御注連ひく宮ゐ照らして波間にもつらなる影や百の燈

嚴嶋大宮禰守 佐伯元賢

好一山 朶々 鏡中 看ル

黃檗萬福禪寺 悦峯和尚

百一尺 殿一樓 海一氣 寒シ

夜有ニ神一燈 光映スル 浪

却疑ッ 星一斗 落ルカト 欄干ニ

をむすひ置て年／＼廻るもあり嶋廻りをするに定れる式用く有て七浦の内才五の
拜所を養父崎やふさきといふ。此所にて鳥喰飯とぐいを上るといふ事あり鳥喰飯とハ
桑しとぎを三ツ折敷に盛り幣へいを切かけたる物なり。其日の御師の船を。はる
かの沖中に漕出し。右の鳥喰飯折敷を海上にうかへて桑を奏そうす弥山の
峯より此沖までハ二里ハかりも有へきに靈鳥ひつうが一雙ひとつがひ弥山の峯より翅つばさを
ならへて飛來り。松のしけミを分出。御師の船にのりうつり。浪の上
にかめる鳥喰飯を。先雄あきがらすあぐる時。船中跡なるも先なるも聲
を上舷かたはたをたゝきて御鳥をはやす。次に又雌めがらす飛來り最前のごとく
あくる時。猶いやましにいさみどよめけとも。中／＼懼おそる、氣しきな
し次に又雄からす飛來りてあくる。桑三ツを已上三度にあくるなりさ
れハ嶋めぐり一日に五艘ごそう七艘多き時八十艘にあまれとも。障さへりなき船と
もハ其数／＼鳥喰飯あからずといふ事なし。かくある中にも若汚穢わふたに
ふる、事あれハ靈鳥出る事なし。たとひ出て御師の船にのり移りても
鳥喰飯をあげず。その時には御師の船をも願主の舟をも跡の浦まで漕
戻し。船中をあらため銘／＼に糺ただす。少しも障ある人をは船よりおろ
し跡の濱に残し置。その、ち船中修禊はらひしてあらたに鳥喰飯を海上にう
かむれハさハリなくあかるなり。そのあやしく妙なる事言語筆舌にお
よふ事にあらず。此奇瑞きざいあるか故嶋廻りといへハ願主をはじめ宿主船
子どもに至るまで。身心ともに清くきよからしむるなり。弥山にても
毎朝供物あり。但し山下に嶋めぐりある日ハ弥山の供物ハあがらず。
弥山ハ朝にて。嶋廻りハ午の刻なるに。あらかしめ其瑞ある事不思議

といふも猶餘りあるをや。惣して嶋の内。かれによせこれにつけて。
凡慮の得てはかるへからざる事数／＼多し。是皆大明神のふかき御め
くミのしからしめ給事ならんと。只仰て貴ミ敬ひ奉るのミ
ある人嚴島八景詩歌を。梓にちりはめん事をもとむるのつゐて。八の
題の趣を書しるしてよとす、めらるゝ。本より美景勝境くハしくこれ
を記しなハ。つかみしかき筆のあゆミもなをやと／＼しからん。今
いさゝか其おもむきをこゝにしるして。他の需をふさき。且ハいまた
見ぬさかいの人に。地を縮てこれを望むおもひをなさしめんたよりと
もなりねかしと。腐毫におよひ侍るものならし

嚴島明燈

比叡山成等院 僧正尊俊

宮嶋や宮ゐにちかく塩みちて波のよる／＼てらす灯

京師梅月堂 沙門宣阿

波間より見えて数ある灯に宮ゐもしるしいつく嶋山

藝州廣嶋 淺野和通

此嶋の神の心にならひてや光くもらて照すともしひ

同

岡本貞喬

我君のあきらけき世の光をハ宮ゐにみせて照す燈

に螢多く飛かふ。あるは滝の白玉にまがひ。あるハ御燈の光をそふ。川邊にそひて流るゝはたるをも。こゝは社頭のほとりなれハ。輕羅の小扇もてうつ人もなし

鏡池秋月 鏡池といふハ客人宮の左の方。朝座屋の前にあり。衆妙集云大聖院僧正良政發句所望ありて十三日一會有當社に鏡池といふあれハ

かけうつす月やかゝみの池の水

すみわたりたる秋の夜の月。くもりなき鏡池に影をうつす。天一水相連同――色 更無織――翳隔清――光とつくれるからうたも此心はへにてそあらめ

谷原麋鹿 谷原ハ御社頭の東方。南町の奥の山の間なり。當嶋には鹿多く。浦く山く社頭の邊。民家の間にも住ミ。人に馴ておそる、事なし。毛色も他所よりハ勝れていとうつくし。谷原の邊を多くふしどゝす。紅葉を踏分てハ秋のかなしさをつけ眞萩をしらみふせて妻こひに鳴夜となくひるとなく聞にいとあはれふかし

御笠濱鋪雪 御笠濱とハ御社頭の邊大鳥居のあたりをすへて御笠濱といへり。潮の干ける時ハ太半洲となるか故鳥居の洲ともいふ。雪の降しける朝。夕のけしき松の梢杉の葉には頃刻の花をさかせ。打よする浪の色も。洲崎にしける眞砂も。一般に白に白をくハへて。誠に粧成銀一世界布定玉――江――山といへる風情にそ侍る

有浦客船 有浦ハ東町の人家。脇小路牛王前町などいふ邊をすへてあ

りのうらといふ高倉上皇御幸記云三月廿八日還幸の御舟たてまつる。内侍とも汀に出て何となく日比の名残しのび思ひたる氣色なり。名残多きよしの哥つかふまつれと有しかは

立帰り名残も有のうらなれハ神もめくミをかくる白浪

風もしつかに物のあはれも春ふかくなりける。おもひかけぬ嶋のうへに。櫻のちりかたになりたるミゆ。いみしくおかしくておほえす三月盡に成にけりといへり。大小となく參詣の諸人乗り來れる舟。又は近國遠境の買賣交易の商船。いづれも皆此浦につなぐなり。櫓聲頻に漕出れハ。帆影やかて走入て。客舟數艘たふる時なし。東語西語憂喜をのかさまくなる事にそ侍る

弥山神鴉 弥山ハ嶋中にて最高き峯なり。麓より廿町ばかりの峻路をのほる。屈曲たる道すがら松杉なと生茂り。嵯峨たる岩峙て。所々清き流あり。山上より四方の見やり又なき風景なり。そのかミ弘法大師求聞持修行ありしより今に至て其修法断る事なく。開持の火今につたハれり。山中堂社五十ヶ所余有ていと殊勝なる靈山なり。神鴉と申ハ昔大明神當島御鎮座の時。五鳥といふ靈鳥御部曲に侍りき。其靈鳥のすゑ年く相續して今も靈鳥一雙此山にすめり。是を神鴉といふ。惣して嶋の内からす幾千万といふことなし。しかれとも此靈鳥雌雄一雙ハ神威妙にして類を離れ群を抜て。餘の鳥近付事あたはす五鳥のすゑ年事なれハ愛にしろさす御嶋廻りといふて此嶋輪をめぐりて。七浦にまします御社を拜し奉る事あり。あるひハ祈願の子細ありてめくるもあり。又講

梁行三丈餘の寶殿なり。大鳥居八間半。竝木長八尺五寸表。嚴嶋大明神後。

奈良院御宸翰御本社正面海の中にたてり。兩社ともに幣殿幣殿。拜殿拜殿。

祓殿祓殿。廻廊廻廊など数くたてつ、けり高舞臺伶人の舞臺。平舞臺平舞臺。左右樂屋左右樂屋。

門客人宮など御社頭の前にあり。平舞臺といふハ御本社の前祓殿廻廊

より造り出して。樂屋門客人の宮まで連り渡れる板敷なり。此板敷百

八十坪余海の上へ張渡し。石を柱に立り。屋根なし。此板敷より幅二

丈はかり長さ十丈ハかり沖の方へ造り出して舌先といふ。御本社正面

なり。御社頭の邊朝座屋。粥座屋。湯立殿。御供屋。寶藏鐘樓。經藏。

能舞臺など屋臺数く多し。

惣して嶋中山上山下にあらゆる。攝社末社并堂塔数百ヶ所嶋をはなれ

て地方にも数くあり社家供僧内侍并諸役神人およそ数百人ありて御

本社より始め末社等年中祭奠さいだんの行事を執行ふなり。年中の行事数く

多し。其事にあつかる人にあらすんハ委知るあたハす先年風早宰相公

長卿あるか中にとりわきたる所をえらみて。嚴嶋八景の題を。冷泉黃

門為綱卿にこひ給ひ。王卿雲客の諸家へわがち配り。詩歌を勸進した

まひしに。各ミづから御筆を染られ。詩歌二卷事調ひぬ。これを予に

たうびてかたじけなくも。大明神の珍の廣前に奉納せさしめたまふ。

かけまくもかしこき神かみの慮しるにも。かくみがける言の葉の玉は。やハラ

げるひかりをそえて。さぞな納受したまふらめと。ありかたくもおも

ほえ侍る。抑八景題目の嚴島明燈といへるハ。御本社。客人社。兩宮

殿へ連り渡れる廻廊百八間あり。間ことに鉄燈籠かねちろうを釣りて燈明を捧く。』

則百八燈なり。其外御内陣外陣常燈常夜燈数く多し。嚴嶋明燈とい

へるはこれなり。惣して潮の満ぬる時ハ。鳥居洲。神前御池の内。御

社頭の後までも満こみて。樓臺ろうだいも全く潮の中にたちて浸るばかりなり。

かくあるときハ廻廊の往来もさなから海の面をあゆミ。足のもとにひ

れふる鱗うろこの数さへ見ゆるハかり。御燈のかけ潮にうつりて。えもいは

れぬけしき。誠に竜たつの都。仙せんの洞ほらもかゝることにやとおもひ侍る。』

大元櫻花 大元の社ハ御本社より坤ひつさるの方にあたつて濱邊にあり是當社

の攝社にてゆへある御社なりといへり。御社頭鳥居のあたり濱邊櫻花

多し。惣して嶋山の内櫻花多しといへとも。此大元の花わきて色香勝

れたるよしいへり。花盛りなる比ハ詣來る諸人も。をのづからなる花

の白ゆふを手向となし。あるハ木の下にけふの日の暮るをおしミ。沖

こぐ舩も過がてに心をと、め磯菜いそなつむ賤めが袖も。をのづからにほふ

らんとそおほゆ

瀧宮水蛭 瀧宮ハ御本社より巳午の方にあたつて弥山へ上る道の邊な

り。是又當社の攝社にてゆへある御社といへり。御社の後の方の山上

より漲みなる水白糸を乱せるがごとし。いにしへ高倉上皇御幸記云三月廿

七日瀧宮へまいらせたまふ公頭僧正哥詠て奉る

雲井より落來る瀧の白糸に契りをむすぶことそ嬉しき

竹内御門主詣てさせ給ひて

山高ミのほれハのほる春の日にくりかへし見る白糸の瀧

此邊をのづかなる水石。景望よろし。流もいさぎよく涼し。夏ハ宵く』

伊都岐 寫八景中

嚴嶋ハ安藝州佐伯郡の海の中にありて。地の方を去ること東西北の方遠きハ四五里近きハ一里ハかり。南の方ハはるかに。周防伊豫の嶋くまても見ゆるなり廻り七里はかりの嶋にて。数くまの峯そひへ谷ふかくして。松杉など生茂り。嶋輪磯際ハ巖峙て。江めぐり。隈くまでも見所あり。濱邊ハいづれも白砂。或ハ小石にて泥土もなく藻屑もなし。松ハ多分女松にて。葉ハ藍よりも青く。木ハ丹塗のことし。正直なるも。屈曲るも。をのつからなる。風景あり。しかのミならず花の晨夏山のみとり月の夕露しくれ霜雪とふり行四氣折くのけしき」までも。つきせぬなかにそ侍る。いかなる妙手毫をふるふとも。えやハおよハん。すべて嶋山の美景。をろかなる口に語らんハ中く浅くそ侍らん。近代來朝の禪師。此嶋に詣て。故國の西湖洞庭の佳景にも。おさくおとるましきよし称美してかゝれたり。宜なるかな奥の松嶋。丹後のはしたて。このいつきしまハ。日本の三絶景なりといへり。いつくしまといふハ。市杵嶋姫命を主としあがめ奉る故に。嚴嶋大明神と申奉るなり。いちき。いつく。ハ音のかよへるなり又此御神の宮地なるが故宮嶋ともいへり。齋ひ奉る所の御神。御本社ハ天照太神のあれませる三女神なり。三女神と申奉るハ。市杵嶋姫命。田心姫命。

湍津嶋姫命なり。相殿に國常立尊。天照皇太神。素盞鳴尊をまつり奉る。客人宮ハ素盞鳴尊のあれませる五男神なり。五男神と申奉るハ。正哉吾勝々速日天忍穗耳尊。天穗日命。天津彦根命。活津彦根命。熊野糠糠日命なり。日本紀云以日神所生三女神者使降居葦原中國之宇佐嶋矣今在海北道中號曰道主貴所謂今海の北の道の中にますとハ蓋嚴島に御鎮座の事なり。延喜式神名式に安藝國佐伯郡伊都岐嶋神社とある是なり。始には豊前國宇佐社に降臨し給ひ。後にハ天下二所の宗廟。石清水の社にてハ。姫太神と齋ハれさせたまひて。八幡宮と和光の御かけをともに照します。誠に皇太神一軀分身の御神。かけまくもかたじけなく。此嶋に御かけをうつされ。皇統鎮護の靈神にして。國家安全夜守り日の護りとならせ給ふが故。朝廷肇祀の官社となり。世々崇重して。あつく常典の禮をそなへ給ふ幸ならせ給ひ。神徳を仰き奉らしめ給ふ。世々の公卿武將も。多く詣てたまひし事。古き文ともに書載侍る。しかのミならず。廣き御めぐみ普く民俗にもたれさせおハしますが故。上中下のわいだめもなく。志の誠をいたすときんバ。かならず冥助を施し給ふ事。いちじくる侍る。寔にありがたかたじけなさ。何ぞ筆舌のこゝにおよび侍らん只仰て信をとるべきなり。御本社ハ戌亥の方にむかせ給ひ。御池のうちに立せ給ふ。桁行八丈餘。梁行四丈餘の寶殿なり。客人宮ハ未申の方にむかせ給ひて。これも御池のうちに立たたまふ。桁行五丈餘

八景詩跋

前一年請嚴嶋八景和歌於諸家
奉獻然思詩是樂章則不可以
無焉故又覓王卿雲客八景小
律以遣柏亭於宮嶋附社司
使奉神祠也

享保元年十一月上浣

參議公長記

八景畫圖與書

安藝州宮嶋者神德威靈而天
山之絕境也故從古為畫圖以
傳于世就中取其最勝者今為
八景圖余固敬其神且愛其景
今應某需自寫其圖以奉納之
永禱助福云

享保六稔仲冬十有五

龍作水原判

奉納畫圖

六條中納言有藤卿染筆

右嚴嶋八景依所望令染筆者也

正三位藤原光兼

嚴嶋八景詩歌作者

嚴嶋明燈歌中院殿
詩妙法院宮

大元櫻花歌冷泉殿
詩勘解由小路殿

瀧宮水螢歌島丸殿
詩高辻殿

鏡池秋月歌清水谷殿
詩伏原殿

谷原麋鹿歌風早殿
詩五條殿

御笠濱鋪雪歌押小路殿
詩唐橋殿

有浦客船歌風早殿
詩冷泉殿

弥山神鴉歌日野殿
詩輪王寺宮
一品親王公寬

奉納詩歌兩卷外題 醍醐大納言昭尹卿染筆

和歌奉納 正德五乙未年六月十三日

詩奉納 享保三戌年四月九日

奉納社式 大祓 神樂 舞樂 社家供僧内侍各出仕 大般若經轉讀

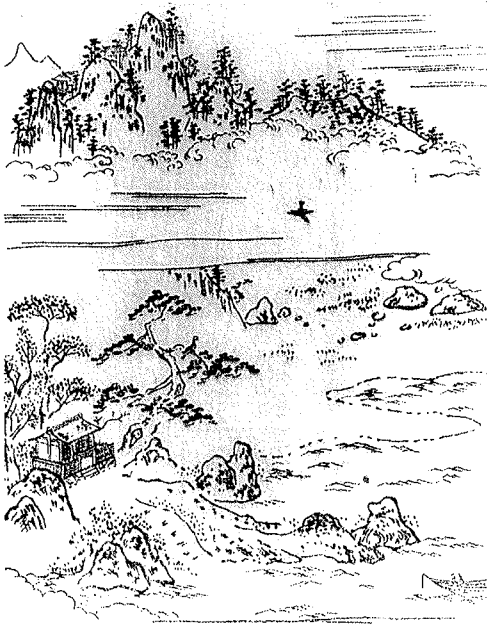
舞樂目錄 振鋒三節 萬歲樂延喜樂陵王納曾利退出 長慶子

此卷首嚴嶋八景之四字 風早三位實積卿染筆

彌山神鴉

此山の宮をさらていくとせか
すめるからすのつかひはなれぬ

山一形如湧趣尤奇ナリ
林一抄深邊雄與雌
豈一有群鴉爭茂樹
一雙萬古護靈祠



黄門輝光

桂洲

八景和歌跋

聚一拳一石寄思則百丈峩々跨凡
上假毫毛遊魂則萬頃滾々流
屏間抱宮之徒常於是馳雅懷
藝市杵嶋皇祖載生神嶋
朝廷肇祀官社獨在于瀛海之
中而浦淑洲演雪月動植幽賞
之景茲為多也故承安皇帝
曾駐蹕壽永槐棘共祈社自余
以還風人墨客來遊之縱不少
也頃日有僧恕信者來請遺佳
景於篇詠今本沈括之東吳八
詠為求冷泉黃門題分賦簪紳
家為八首之和歌寄之祠官
奏幽冥以禱無恙云

正德五年仲夏日

參議公長記

御笠濱鋪雪

浦なミの色もひとつにふりつもる

ゆきをミかさの濱のまさこ地

白―雪 重―々 御―笠―濱
 平―砂 十―里 更―清―新
 夜―來 最―覺 好―風―色
 寒―月 和―光 同―玉 塵―



從三位實岑

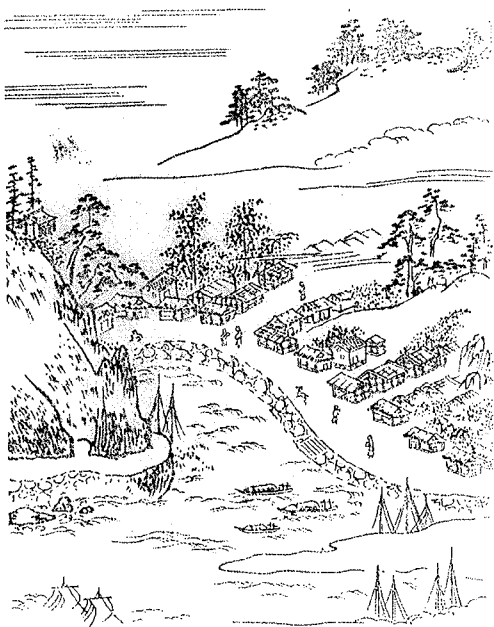
侍從菅原在廉

有浦客船

つなきよるたよりやありのうらなみに

とまりさたむるふねそかすそふ

激―瀧 波―光 有―浦 前
 石―磯 一―望 水―連 天
 無―朝 無―暮 問―津 話
 去―々 來―々 幾―客 船



參議公長

戸部尚書藤原為經

鏡池秋月

所から月もか、みの池の名を
見せてや秋の影ミかくらむ

海一門、靈一跡 甲^{タリ}二西一洲^ニ
嚴一寫、佳一名 千一古 悠^{ナリ}
多一少、行一人 富^ム二觀一賞^ニ
瑤一池、明一月 鏡一池、秋

三位清原宣通

羽林雅季



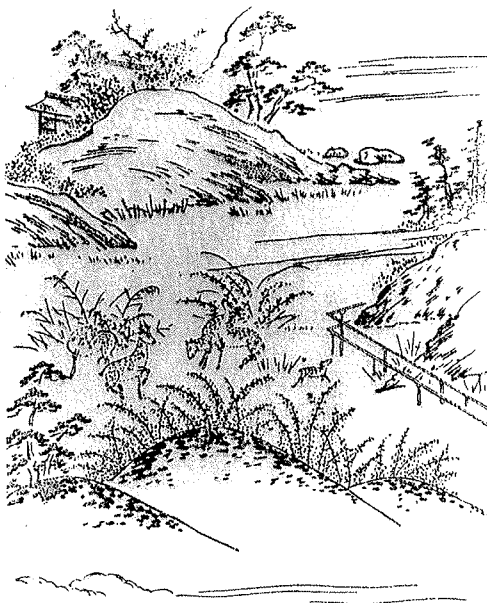
谷原麋鹿

鳴鹿のこゑそ殊なるやつかはら
岡邊のまつはときはなからに

傳^ヘ道^ッ原一頭 物一色 幽^{ナリ}
清一風 爽一氣 不^スレ因^ラ秋^ニ
数一株、松一樹 陰^キ深^レ處^ニ
旦一暮 只看^ル 麋一鹿、遊^ブ

翰林學士菅原為範

親衛中郎將實積



大元櫻花

見まほしき花の下陰これもまた
神のいかきやこえてとはまし

祠^ハ在^リ仙^ノ山^ニ 蒼^ニ海^ノ濱^ニ
白^ク櫻^ハ相^ヒ映^ス 滿^ニ階^ノ 春^ニ
雲^ハ蒸^シ霞^ハ散^ル 常^ニ 徬^ニ 佛^ノ
一^ノ段^ノ 風^ハ流^ル 仰^ル 此^ノ 神^ノ



銀青光祿太夫為久

從二位藤原韶光

瀧宮水螢

此宮のひかりそへてやよひくの
ほたるも瀧の玉とみたる、

森^ノ々^々 綠^ニ樹^ノ 邊^ニ宮^ノ邊^ニ
南^ノ岳^ニ 懸^{ツテ}雲^ハ 吐^ク立^ニ泉^ノ
萬^ノ點^ニ 水^ハ螢^ハ 三^ノ伏^ノ 夕^ニ
涼^ニ風^ハ 亂^ル影^ハ 似^ク秋^ノ天^ニ



右中辨光榮

給事中藤原總長

伊都岐寫八景上

嚴嶋八景

嚴寫八景題目

嚴嶋明燈

瀧宮水螢

谷原藥鹿

有浦客舩

題者

大元櫻花

鏡池秋月

御笠濱鋪雪

彌山神鴉

冷泉中納言為綱卿

嚴嶋明燈

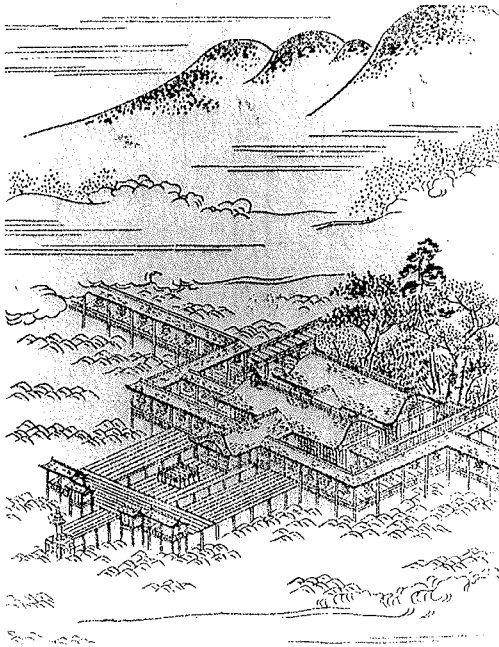
しほみては波にうつるも数ぞ見る

此ミやしまの宮のともし火

嚴嶋雲晴飛繡薨
宮廊壯觀壓西瀛
神燈波面百千點
添着和光夜々明

正二位通躬

二品親王堯延



・朝倉尚『「嚴島八景」考―正徳年間の動向』

（『瀬戸内海地域史研究』第二輯）

・朝倉尚『「嚴島八景」考―野坡と芸備地方俳諧』

（『瀬戸内海地域史研究』第四輯）

凡 例

一、原本に忠実であるように心掛け、表記についても、古字・異字・略字や誤字などそのまま用いたが、改めた場合がある。

一、中巻・下巻については、二丁の表の末尾に「の印を、裏の末尾に」の印を付して丁移りを示した。

翻刻『厳島八景』

宮島歴史民俗資料館学芸員

高橋修三

『厳島八景』は、宮島の八景を詠んだ和歌・漢詩・連歌・俳諧の作品集である。上・中・下の三巻からなり、上巻には和歌・漢詩と八景の挿図を収め、中巻には和歌・漢詩・連歌、下巻には俳諧を収める。

厳島八景の景目は、冷泉為綱によって選定され、正徳五年（一七一五）に八景和歌（八首）、享保三年（一七一八）に漢詩（八首）、同六年に八景の絵図が厳島社に奉納され、これらをまとめたものが上巻となる。これを契機に、その後、各地の諸家から寄せられた詩歌連俳を中巻、下巻として編集し、元文四年（一七三九）に刊行されたのが『厳島八景』である。

八景の景目選定より編集・刊行に至るまで、これを企画し中心的な役割を果たしたのは宮島の光明院の僧恕信である。また、公卿などとの仲介には石清水八幡宮神職の柏村直條が、俳諧については志太野坡が門弟を指導して編集にあたっている。

恕信がこのことを発企した理由は、借りものとしての八景を脱却し、宮島にふさわしい「勝景をえらび詩歌をさだめ」ることであった。それは恕信のみならず、宮島の文芸を担った「厳島連中」の願いでもあった。

その意図は達せられ、宮島の文学史において一つの記念碑と位置付けられる作品集となった。更に、厳島八景を創造することによって、広く景観を再認識し、イメージを社会的に定着させていく上でも、大きな意味をもったといえる。今後、個々の作品に即して歴史的な実態を明らかにしていくうえでも貴重な資料になると思われる。

『厳島八景』については、これまで後掲の文献において成立の経緯や内容等が解明されており、大半が活字化されている。ただ、全体としてまとまってはならず、一部に異同も見られる。

ここに翻刻するのは、資料館所蔵の水色表紙蝶鳥模様の三冊本である。縦二三・三糎×横一六・九糎。表紙中央の題簽にそれぞれ「伊都岐寫八景 上」、「厳島八景 中」、「伊都岐寫八景 下」とある。上巻は一丁で、和歌と漢詩を各八首と八景の挿図を収める。中巻は五八丁で、和歌一九一首、漢詩文五七編、連歌発句五二句を、下巻は五九丁で俳諧発句六〇〇句を収める。下巻に「宮岳 玉壺堂藏版」の刊記がある。なお、翻刻に際しては、以下の文献を参照した。

- ・『復刻芸藩通志』第一巻
- ・金子金治郎「厳島の文学」（『秘宝 厳島』）
- ・米谷巖「元文四年『厳島八景 下』——解説と翻刻」（『内海文化研究紀要』 第二四号）
- ・下垣内和人『芸備俳諧資料集』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

宮島の歴史と民俗 No. 11

平成6年3月15日 印刷
平成6年3月25日 発行

編集 宮島町立宮島歴史民俗資料館
宮島町史編さん室
発行 宮島町立宮島歴史民俗資料館
広島県佐伯郡宮島町 TEL 0829-44-2019

印刷 株式会社 ニシキプリント

